

此忠實なる下婢某の名は聴き漏らしぬ。

▲一日の差にして無事 籠手田氏と共に山林課に在る岡田亥八郎氏は、岡山の大林区署より轉じたる人なるが、一端一人にて別子銅山に到りしも、何かに不自由なる處より、岡山に留めたる家族を連來る可く出發して、廿九日、新居濱に着したるが、船中にて右の異變を聞き、一方には籠手田氏等の不幸を悲しむと同時に、一方には一家の好運を喜び居たり。

▲一家十二人悉く死す

販賣科主任松村榮松氏(三十一)の一家の如きは、

小足谷の自宅にて一家悉く惨死を遂げたるが、同氏の夫人の妹婿なる篠原猶吉氏は、同日、松村氏の令息の晝間より遊びに來り居りしが、彼の大雨中、令息は、連りに宅を戀しがり、早く家へ歸りたいと言ひて止まざるより、然らば送りて遣はさんとて、篠原氏自ら令息を伴ひ、遠からぬ、松村氏の宅に送行きたる儘歸り來らず、一家十二人と共に

非業の最期を遂了んぬ。加之同じ小足谷なれども、篠原氏の宅は無事にして、家族は一同異狀なかりしといふ。令息の歸りを急ぎたるは、父母兄弟と共に逝く、死出の旅路を急ぎたるなり。嗚呼、何等の慘絶ぞや。

▲重なる人にて一家族 死亡せるは、志尾貫一、筒井岩太郎、石川喜

平、近藤信藏、脇本金太郎、岡田知二の諸氏なりといふ。

▲最大悲劇 用人佐伯哲氏の長子某氏(十一)は郷里山口の學校に在りて、勉學中、暑中休暇なるを以て、別子に來り、久々にて父母の膝下にあるを得、樂しく遊居りたりしに、俄に家潰れて佐伯氏は梁の爲に腦天を打たれ、即死を遂げ、夫人は乳呑兒を抱へたる儘、箆筒の間に挟まりたるより、天幸にも九死を出でたれども、天井の下に押されて、身動き爲る事も出來ず、全身雨水に浸され居る内、後の方に長子の聲にて「母アちゃんく」と叫ぶ聲の聴ゆるにぞ、此方よりも聲を發して、

は先を越して「今夜も代つて上げませうか」と言ひたるに、珍らしくも札氏は打消して「いや、難有いが、今夜は私が遣ります」と答へて、役所に其夜は残りたるに、俄然、彼の大災害にて實母と妻女及び妻女の實母と、實弟若山某氏の子息と、一家悉く惨死を遂げたるが、若山氏の子息といふは、札氏の實母には初孫の嬉しさに、連來りて、愛し居たるものにて、發掘したる時には、孫に腕を枕とさして、老母の死し居たりとぞ。

▲兄弟前後して惨死す 古川八兵衛といふ人に、二人の息子あり。兄は山に上りて、役所に在り。弟は鐵道に勤め居りしが、去る舊曆の盆の十六日に、瀛車に觸れて即死し、兄も今回の災害に遭ひて、敢へなく山上に死したりと。親の身になりたらば如何に悲しき事ならん。

▲籠手田氏の惨死に就き 聴けば聴く程涙ならざるは無し。此春の事なりとか、戯れに賣卜者に、身上を見て貰ひたるに、易面には、秋の

頃、水難の相あり、慎しむ可しと言ひたるを、籠手田氏は一気に附し去りたるも、夫人は有繫に女氣の、心配に耐へやらねば、籠手田氏が山に入る其時は、知れざる様に腹巻か、又は紙入の其中に、水難避の守札を、必ず入れる様に爲し來りしを、今回に限りて忘れしこそ、返すくも残念なれど、思ふまじとしてもいかで諦めらる可き。時々之を語出しては、又さめくと泣咽ぶも、無理ならぬ事といふ可し。又同氏の山に行く前日は、珍しき程機嫌能くして、何を思出してか、歌留多を取らむと言出し、負けたらば麥酒を驕る可しなと戯れ、扱て出立の時も、常は性急の質なれば、それ、脚半よ、それ、靴よ、と火の點く如くに急ぎ立てつ、少しにても氣に違へば、呵り付けて行くが例なるに、其日に限りてにこくと打笑ひ、さもなく機嫌能く出で行きしとは、永別の暇乞、虫が知らしたるものなりけむ。

第六報 (九月二日新居濱にて認む)

▲支配人杉浦讓三氏の談話 住友鑛業所の一室にて、支配人杉浦讓三氏に面會し、百忙一身に集れる氏より、左の如く最も懇切なる談話を聴く事を得たるは、我の深く謝する處なり。

「はい、如何も飛んだ事で御座いました。しかしわざわざ遠方からお出で被下いまして……私は此災害が起りましたから、今日まで大方此室から一足も出ませんで事務を取つて居りますので、一向事情が分つて居りませんが、まア山の方では死骸の發掘に全力を盡し、此方からは食物の供給に全力を盡すと言つた様な次第で、丸で戦争で御座います。初め二十八日です、此方も非常な暴風雨でありまして、電話線も切れ、鐵道も通じません。さぞ山上は酷いであらうと思つて居りましたが、夜に爲つて、石ヶ山丈の方に當つて、火の手が見える。これは容易ならぬ事と存じまして、人を三人も特派しましたが、一向歸つて参りません。其内二十九日の午前九時に向ふを二時に出た山林課の

ものが二人。岩角や木の根を傳ふといふやうな次第で、非常な難儀をして降りて参りました、初めて今度の大事變を知りましたやうな譯で……まア何しろ大變であるからといふので、新居濱の役員を大方山の方へ出張さしまして、残つて居りますのは私にそれからホンの二三人で。いや、唯今は斯うして少しでも御話が出来るのですが、昨日までは非常に多忙でありまして……其内愛媛縣の參事官が、赤十字社の醫員を連れて来て被下いまして、大變好都合で。所が、變報が大阪の本店に達しますと直ぐ、陸軍の方へ交渉がありまして定めて負傷者が多からうといふので、三十一日には此方へ着されましたが、御案内の通り負傷者は存外少數で、却つて御醫者の方が多い様な譯で……それが其負傷者の少いといふ事は、私も漸く昨日知りました位です。本日は赤十字社の支部から陸軍の救護團の方へ引次ぎに爲つた筈です。で、最初は丸で事情が分りません上に道が第一ありませんから、兎に角と

いふので、人夫を以て道を開きまして、米を持たして運ばしめるの
 に、最初は一人が二升しか持つて行かれませんが。道が開けるに従う
 て、二升から三升、四升から五升、今日では最う一俵宛運搬せられる
 だけの道が開けました。食物は如何やら間に合ふ様になりましたけれ
 ど、山の方は寒う御座んすから、避難者が薄衣で困つて居るさうで
 す。其方の準備を只今致して居ります……」

▲惨 又 惨

◎何千丈といふ深谷は埋没して影をたも留めず◎警部長は出張の警官に
 命じて、深谷の原形に復するまでに掘りても死屍は必らず餘す處なく取
 出せよと嚴達したりといふ◎半身土中に埋れたる死骸恰も杉苗を植ゑた
 る如く多かりしと◎其顔は横に廣く膨れたるあり、縦に長く延びたるも
 あり、何人なるか逆も判別仕難しといふ◎本日(二日)までに二百人は發
 掘して、七十人火葬にしたり。

第七報 (九月三日小足谷俱樂部にて認む)

三日午前七時、新居濱惣開の住友鑛業所構内より瀛車に搭じ、別子銅山
 に向ひて出發したり。山林課員岡田亥八郎氏の注意にて、特に我が爲に
 人夫を給せられ、輕装の我をして益々身軀を敏活ならしめたるのみか、
 又なき案内者を得たるを喜ばざるを得ず。同列車には時事朝日毎日等の
 同業者あり、寫眞師あり。扱て列車は立川村の入口なる給水所に至りて
 留りぬ。此所より先は線路崩壞して運轉爲し得ざればなり。
 我は立川村の慘状を見て既に胸塞がりぬ(戸數三百八十戸、人口千零十
 二人の内、七十戸流失して百二十六人死亡)詳細は別項にて報ず可し。
 端出場にて下部鐵道線路は盡きたり(六哩四十二鎖)是より石ヶ山丈ま
 では一里の峻阪を攀ぢざる可らず。我は一時も早く目的地に達せんと思
 ふものから、他の視察員の後押人夫を傭ふ可く待ちつゝありしにも拘ら
 ず、同伴の人夫を督して疾走、石ヶ山丈の運輸分課に到着したるは、午

前十一時二十分なり。
 運輸分課員波多野忠朗城木範理兩氏に面會して、石ヶ山丈人家焼失の慘狀を聞きぬ。此所は銅山と新居濱との殆ど中央にして、登る者、降る者、一時に落ち合ひ、人夫工夫入亂れて、非常の混雜を極め居れり。此處を出發して破壊せる上部鐵道の線路を傳ひ行くに、幾度か數千仞の谷底に、岩石と共に落下せんとし、或は墜落せる鐵橋に枕木一本架渡したる上を傳ひなぞして、漸く角石原に達したり。此間山霧深く封じて、殆んど咫尺を辨せず。おひこにて米穀を運び行く人夫の群に、何回となく衝突せんとして、彼我互ひに危き限りなりき。
 石ヶ山丈より角石原まで三哩三十五鎖、此所は別子銅山の北門にして、十一町五十二間の長隧道あり。人車鐵道二條を通ず。我は松明を人夫に持たせ、徒歩にて進入したり。
 内部には點火しわれど、暗黒なる事闇夜よりも甚し。我既に九泉の下に

在るかど疑はれぬ。隧道の南門に出れば、此所既に別子銅山。燒鑛の烟朦朧として谷々を封じ、未だ慘狀を眼にする能はず。先づ小足谷の山林課に至らんと欲して人夫を促したるに、人夫躊躇して進まず。其故を問へば『今度の水害から初めて此所へ參つたのですが、家が無く爲つたり、道が壊れたり、又谷が埋つて、飛んでも無い處へ平地が出来て居ますから、如何も分りません』以て其の慘狀の尋常ならざるを察す可し。
 漸く山林課に到り、課員今澤磯之輔氏に面會し、非常の場合なるにも拘らず、氏より懇篤なる待遇を蒙り、且又多端の際なるにも關せず、氏自ら先に立つて、被害の個所をわざ／＼案内せられ、便利を得たる事尠からず。是皆開かざる紹介狀の効力にして、死せる籠手田氏の指導せるにやと思へば、悲しさ遣る方無し。
 沈澱池の破壊したるを見、販賣課を訪問して課員より種々談話を聞き、此所を出て、埋没したる水車場を發掘する現場を視、松村籠手田札其他

諸役員の居室の流失したる跡を巡覽し、それより立還りて、足谷學校の救護場、製鍊課、熔鑪等を経て、最も慘を極めたる見花谷兩見谷等を過ぎ、住友病院に入りて、院長藤並忠三郎氏、醫員高原清二郎氏に面會し、兩氏に被害者の施療等に就きて質問し。それより又舊路を降りて、小足谷俱樂部に入り、此所に一泊する事となりたるが、折好く警官の一隊來合せたるより、一行よりも當時の慘況、死骸發掘の模様などを聽き、得る處からず。

以上は私の視察したる順序を語りたるに過ぎず、是れより見聞したる慘狀を細大漏らさず報道せんぞとす。

▲四百年來絶無の洪水 今回の災害は今日まで未だ曾て知ざる處と、八十何歳の老人より聽きたりとして、喋々しく言ふ人あれど、八十年處にわらず、四百年此方絶無なりしといふ事を證するに餘りあるは、立川村の八幡社内にある老松なり。同樹は根より二間程の箇所より三股

に開き、其真中に四十貫程の大石を挟み居り、八人の手と手を繋ぎ合せて、其周圍を計るに、未だ一尺程の不足を見るときいふ程なれば、少くも四百年前の物なりと言傳へ居りしに、今回の出水にて押流され、瀧濱の城下といふ處に打揚げられ居る由なるが、根も枝も悉く折れ盡して、丸で摺子木の如く成り居りしと。

▲死屍發掘 鑛夫岸下峯吉(七十)は一家十二人なりしに、他の十一人は幸ひにして助かりしも、峯吉唯一人横死を遂げたるは、誠に運の無き男なり。發掘せる周圍には、多數の人集り、手に手に線香を持ち、穴の中へ投入れ、念佛を唱ふるなど、悲惨限り無し。同人の死骸は朱を澱ぎたる如く赤色に變じ居り、臭氣堪へ難きにも拘らず、同人の妻ハヤ(七十)は娘のマツ(二十)を背負ひながら、傍近く寄りて、聲を放つて打泣くに、稚き子も母の泣くに連れて、唯何事をも知らず、之も悲し氣に泣出すには、思はず我も貫泣きに袖を濡らしぬ。然れども、既

しより、避難者の逃路を照らされ、意外の助けを得て萬死を免れ、一命を全うしたる者少からず「これは神様が火を點して被下つたのぢや」と言ひ居れり。同村民曾我傳次郎の妻某女の如きは、危く水中に陥らんとする處を、急に光の射したる爲め踏留りて、危く玉の緒を繋ぎ得たりといふ。

▲助けられて再び死す 五十二三の男腰を打れて立つ能はず。災害の最中人夫に擔がれて、病院に來りたるを、不取敢寢臺の上に寢かせ置しに「家の者が氣に掛る」と言ひては、幾度となく外に這ひ出さんとするより、家は大丈夫だから寢て居れと言ひ置き、當夜の事なれば、醫員も看護人も、救護の爲に奔走して殆ど病院にあらす、初めて曉方歸りて見れば、右の男は寢臺の上に居らず。何處へ行さしやら其後一向知れずとあれば、家族を案ずるの餘り、這出して、前の激流に陥り、折角助けられたるを、我から死なしたるならむとの話。

▲災害後の七不思議

- (一) 泣くよりは笑ふ (あまりの慘狀に神經の變動やありけむ泣く者少くして笑ふ者多し)
- (二) 上から大水 (通常の洪水ならば、椽の下から次第々々に浸水し來る筈なるに今回の二階より先に來る)
- (三) 米有りて米無し (販賣課の倉庫には玄米千五百石あれども日に三十石宛搗き得る水車場破壊して白米二百石の搗溜めの内百七十一石流失し玄米の内六百石流失し三百石濡れたるより玄米ありて白米無し)
- (四) 埋めたのを掘出す (死人を埋めるといふは通常なれど埋りたる死人を掘出すも不思議)
- (五) 晝夜無し (役員一同大奮勵にて晝夜無しに執務奔走す)
- (六) 草鞋を枕 (草鞋の欠乏より他の者に奪はれざらん爲め人夫は枕

として眠る)

(七)大水に水無し(竹樋又は鐵管にて遠隔なる地より引き居りしも今回の崩壊にて水手絶ゆ)

●見聞一束 鐵橋の橋臺は悉く磨滅して赤煉瓦は摺鉢を伏たる如し●銅山は月末の勘定にて鑛夫等は受取たる給料を悉く賭博に打込む處より月末から月初へ掛けては諸方より遊び人又は商人多く入込み居れば今回の死者の現数は意外に多数ならんとの事●見花谷の上は大洞口を生じたり●橋梁は十三個所陥落したり●負傷者は大約六十名にして其内重傷者三十五名は確實なる計算なり小別すれば小足谷(五名)熔鑛爐(五名)兩見谷(八名)見花谷(二名)其他(五名)にして入院後の死者二人現今危篤二名

第八報 (九月四日新居濱にて認む)

四日午前八時、小足谷俱樂部を發足し、銅山川の水、血の如き色して流

るを、右にし、左にし。鑛石を焼く烟の吹風す山風に連れて、立昇る朝霧と打混じ、行手の方を遮ざるを突入りて進むに、硫黄の臭氣鼻口より入來つて、涙の他に我を咽ばしむ。

郵信の不便なるを思ひ、一日も疾く山を降りて、此慘狀を讀者に報せんと欲するものから、急歩、第一隧道を抜けて、山上の鐵道線路を傳ひ、石ヶ山丈に到りたる時に、慰問及び視察として登山せる家長住友吉左衛門氏理事河上謹一氏等の一行に會したるも、混雜の際にはあり、我も亦歸途を急げば、河上理事に數分間の面晤を得、それより鐵索下の急阪を一の谷流に駆け降りて、舊路を新居濱に辿り着きたるは、午後一時過ぐる頃なり。

●醫師高原清二郎氏の談話 同氏の宅は兩見谷に在りしが、家屋は悉く押流されたるも幸ひにして一家七名、恙を得たりといふ。今同氏が當時の模様を委しく語りたるを、筆記して下に掲ぐ『火の玉の飛ん

だといふのは實際です。私はいつもの暴風だと思つて、格別氣にも仕
て居ませんでした。如何にも雨が酷いのです。其上に雷鳴の様な一種
妙な音響が仕て、戸の間から射し込む電光といふものは實に物凄いで
す。戸を明けて見ると地上二三尺の處を火の玉が飛ぶです。電話線か
ら電氣が漏れて發しるのでは無いかとも思ひましたが、其方には線が
無いのです。水蒸氣の關係であつたかも知れませんが……其内には線が
常の水で、これは溜らぬと思つて、表の方へ出やうとしますと、や、
其所は最上、崩壊して家が流れて居る。これは大變だと思つて、裏へ
廻らうと思つたのですが、裏手は崖でありまして、窓はありますが、
出口がありません。仕方が無いから硝子戸を敲き破つて、それから弟
の息子で三歳に爲りますのを、片手を取つて其所から引出しました。
他の者も其所から辛うじて出ます、出た處で崖の上は人の家であり
ますから、例の張盤の下へ一家の者が入つて縮まつて居ました。其内

上の家から座板を剝して、それで漸く一命が助かつたといふ次第で……
私は病院の方が氣に掛りますから、病院へ駆け着ける、イヤ、駆け
着けると言つても大變です。水が乳の邊まであります中を、辛うじて
病院まで行きますと、其所は無事でしたので、兎に角暗くては避難者
の便利が悪からうと思ひまして、縋帶の古屑を澤山持つて来て、其上
へ石炭油を振掛けて、入口で以て火を點けて燃さしたのです。其爲め
に一時四邊が明るく爲つたので、目出度町の住民は非常に力を得まし
た。前の岩山へ驅登る事が出来て、危く谷底へ落ちて押流されなかつ
た者が四十人からありましたさうです。院長は小足谷の方に住して居
るので、道路が崩壊した爲めに來る事が出来ませぬ。同僚の神尾氏は
御承知の通りで、いや如何も酷く困りました。水が引きましてから出
るもの引くもの速かでありました。人夫を従へて救護に出たのです。
四方に聴えるのは救助を呼ぶ聲で、泣く、叫ぶ、や、如何も悲惨の極

で、何處から手を着けて好いやら分りませぬ。それに丸で道が無いのです。何處から持つて来たか人夫が繩階子を持つて居て、岩の上へ如何して登りましたか、人夫か先へ登つて、それから繩階子を下して呉れたものですから、それを傳つて登らうと、足場を計つて、岩から岩へと飛ぶと、飛んだ岩の下の方で、婦人の聲で叫ぶのです『助けて呉れ、助けて呉れ』と虫の息で叫んで居ます。助けて遣らうと思つて、岩を取除かうとしたのですが、如何して、二人や三人の力で動かされる岩では有りませぬ。不憫ではありましたが、負傷者はそれ計りでは有りませぬ、彼方にも此方にも『助けて呉れ』と叫ぶのですから、『今に助けに来て遣るから、氣を丈夫に持つて居れ』と言つて置いて、それから上の方へ行きますと、土砂の中から足だけ出して、動かして居る。然ういふのを二名だけ掘出して、手宛をして遣りました。何しろ少しでも息のある者は悲鳴を揚げる。地を踏んで下を見ると、必ら

ず其所に死骸がある。それから午前の四時頃まで、澤山手宛をしましたたが、或る婦人などは右の足が無いのに、顔が泥に塗れて眞黒で、二目と見られませんでした……』

▲盲目按摩死す。姓は聞き漏したるが、猪之吉といふ按摩は、三十何年の間、山に在りて、盲目ながら地理に明るく、阪路なども平氣にて歩き居りしに、今回の變災にては逃ぐる事能はず。敢なく最期を遂げたりといふ。ポンペイの噴火に、獨り活路を知りて走りたりといふ、花賣の盲少女に似て非なりといふ可し。

▲岩上に登つて生を保つ。南光院といふ淨界あり。裏手の方より崩壊して、寺院は全く轉覆爲し椽下が上と爲りて土中に埋り居る上に、大なる岩石何處よりか落來りて留り居るが、寺男多平(六十)は轉覆の際寺中に在りしにも拘らず、如何にせしものか、夜の明けたる時には、身は岩の上に乗りにて助かり居り、是全く南光院様の御蔭なりと、隨喜の

涙に咽び居るといふ。

▲疲勞の爲手を放して死す 鑛業所の前の谷に押流されたる一人の鑛夫は、幸ひにも張盤の支柱に取着き、両手にて確と抱きながら、五六分間は此所に留り居りしも、激流の爲めに奪去らるゝ力の強きに加へて、身軀の疲勞甚だしかりけむ、遂に手を放したる爲め、其儘何處ともなく押流されたりといふ。

▲圍碁の最中不意の浸水 立川村に某合資會社ありて、田藤本某其他二三人宿直爲し、圍碁に餘念なかりし折柄、非常の暴風雨にて、窓の戸を吹脱す勢ひに、這は適はじと四人總立と爲りて、戸を押へたれど力及ばず。是非なく疊をめぐり、座板を剝がして、窓に釘付けとなしたれば、漸く其方の防ぎは着きたるより、さア、今度はお前の手ぢやと、碁盤に對して更に石を下さんとする一刹那剝がしたる座板の穴より、一時に濁水を吹出したるより、這は何事と驚く時には、既に碁盤

の上より二寸位高く水の浸入し來り、慌てながら一同の立上りたる時には、既に早や腮の邊まで水嵩増さり、表に出でんとしたる時には、迎も丈の立つ可きにあらず。然れども幸ひにして、一同水心のありしかば、泳ぎて辛くも一命を全うしたりと。

▲小池支配人金盃を叩く 小足谷に居住せる支配人小池鶴三氏は、事の急なるを知り、屋上に出て金盃を叩き鳴らしたるが、眞先に應じて聲を掛けたるは、確に籠手田林學士なりしといふ。されば同學士は俱樂部より降りて、自宅の前まで來り、未だ屋内に入らざる時に、激流漲り來り、其儘に押流されたるものならんといふ。

▲子息一人重傷を負ひて助かる 大西房吉なる人の一家は悉く死亡したる中に、子息某十このみ助かりたるも、非常の重傷にして、赤十字社の出張部に入り、療養中なりといふ。

▲佐伯哲氏父子の慘死遺聞 佐伯氏は令息を手にて指上げ、疊の上は

浸水せるを以て、管笥の上に置きたるが、それと同時に家壊れて、梁の爲に頭部を碎き、其時に死したるなるが、其前に落來りたる天井を、全力を盡して支へたる故なりけむ、右の手は如何にしても曲らず、棺に入れる時に頗る難儀なりし由。又令息が管笥の上にて、浸入する濁水を頭より蒙り、それを口から注ぎ込まれる苦しさ、「母アちゃん苦しい、最う厭ぢや〜」といふ聲を、母なる人は聴きたるも、十回目より後は絶えて聲なかりしと。

▲避病院に在りて災害を免る 字芋野の高橋金太郎の妻イソ(七十)といふは腸窒扶斯に罹り、看護人として實父の某と共に、保土野の避病院に入りて居りしが、本家の方は押流されて、姑女も良人も死亡したるに、二人は幸ひにして助かりしと。

▲見聞一束 去る三日の夜、過つて鑛業所の二階より落ちたる者あり。其物音に驚きて、災害の再發かと人々上を下への混雜を爲したりとい

ふ。風聲鶴唳とは之等をやいふならむ◎住友病院の組織は醫員三名、藥局員三名、事務員一名、小使三名にして内一名看護夫を兼ねるといふ◎橋梁の未だ陥落せざる時には、其橋杭に死躰の引掛る事、無数なりしといふ◎變災の後は、雨天續きにて、布圍衣類等を乾かす間のなかりしが、三日に至りて漸く晴天を見しかば、泥に塗れ水に浸されたるを軒又は岩の上に、到る處晒らし居れり◎運搬人夫の内には、壯年と、少年と、娘子と、自から隊を異にして立働くも面白し◎死躰一個を掘出せば、三圓を得。然らざる時は日給五十錢なりといふ◎握米飯の製造元は、頗る奇觀なり。大釜にて爨出し、それを十四五人の女隊にて結びに造り、桶に盛りて運搬し分配す。販賣課に屬する分のみにても、一日に五石宛を給するといふ◎南光院の御園にて三日以内に變災再來するとして、人心兢々、下山者多かりしより、右は虚聞にして決して然る御園の出でたる事無しとて、南光院より諸所に張札を爲せし

かば、漸く沈静に歸したるが、此風説の源は、鑛夫中の無頼漢が、今回の變事を期として、逃走せんと心の心から、斯く言觸したるものなりと。

第九報 (九月四日新居濱にて認む)

▲住友病院長の談話 同院長藤並忠三郎氏に面會して、當時の慘狀を聞くに下の如し「私の宅は小足谷に在りますが、常夜の初めの内は、例の暴風で今まで度々あるのが又來たのだと思つて、格別心配も仕て居りませんでした。斯うして柱に凭れて居ますと、酷いもので、丸で船の橋へ凭れて居る様に動揺するのです。それが、左右動計りでは有りません。上下動もあるのです。左様、多分一尺位は左右に動いだせう。すると外の方で連りに人がおらぶ(叫ぶ)やうです。が、此別子では風が酷く吹く時には、人々が門口へ出て、大きな聲でおらぶと、其風が他へ避けるといふ事を、昔から言傳へてあるものですか

ら、大方、それであらうと思つて居りましたが、如何にも夫れが酷いものですから、外へ出て見ると大變で、前の方の家が悉く流されて居る。おらんだのは流された人の悲鳴であつたのでせう。其内最う水は家中に浸入して来る、出る事が成りません。如何で死ぬるのなら一家族、家の中で覺悟をして、一處に凝固つて居ましたので、幸ひに無事でした。狼狽して外へ出やうものなら遣られたかも知れません……それから、兎に角病院へ行かうと思つて出て見たのですが、如何して道路が酷く壞れて居りますので、逆も先へは行かれませんか。仕方がないから、宅の方にも藥品や施療機械のあるのを幸ひに、近所の負傷者を見舞ふ事にしましたが、いや如何も慘酷とも何とも形容の仕やうがありません。土中に埋没されてから、それを掘出したのに僅か二三十分間しか経過して居ないのも、連れて來ると誰が誰やら分りません。顔が丸盆の様に大きく腫れねがつて居て、恐ろしい様です。常人は唯

茫然として居る計りで、息の通ふといふだけです。丸で死人も同然です。傷と言つて、外部の方には、少しも有りません。見た處は唯一面に腫れて居る計りで、皆内部に打撲傷がありますので、其他には關節が脱れた位で、些とも血の氣は見えません。又血の出る程の怪我を仕た者は、必ず死んで居りますので、扱て其顔の腫れて助かつて居るのも、少時すると脳震盪を起して死んで仕まふといふ、眞に如何も治療が困難でありました。中には熔鑛爐の傍に居ります村上常次郎といふ人の家へ往つて見ますと、家は大概破壊されて、僅か四疊敷の間が残つて居る。其所の狭い處には十人から寝て居るのです。皆怪我をして、丸で鮨を漬けた様に寝て居ました……」

▲二狂女岩上に佇立す 立川村の八幡宮の下手にある大岩の上に、四十二と二十四五との二人の女あり。毎日々々此所に来て佇立し「今日も流れて來ぬ、昨日も流れて來なかつた」とつぶやき合へり。這は

立川村字板の本春神勇次郎の妻テルと佐關德吉の妻キセの二人にして、二人とも良人を失ひたるより心狂はしくなり、其死躰の流れ着くを岩上に居りて待つと稱して、毎日々々此所へ來るなりと。慘絶々々。

▲良人の溺死を知らず 姓名を聞漏らしたるが、同じ立川村に新夫婦ありけり。二人手に手を取りて難を避けしは確なるに、夜明けて見れば、良人は傍に在らず。いつしかに押流されたるを、知らでありしものならむ。

▲愛兒の溺死を知らず これも同じく其名を逸したるが、浸水急にして、家より出る能はず。腮の邊まで水中に没したる一婦人、双の手に全力を籠めて、愛兒を頭上に捧げ居りしが、水退きて見れば、何時の間にもやらむ、兒はわらざりき。手を放したるを知らでありしなり。

▲老婆孫女の衣を得て泣く 小足谷の精米所が埋没して、殆ど其屋根

と河底と平均したる事は、前に報道したるが、それを發掘したる時に、少女の衣物を泥土の中より得て、其縞柄より市橋某の孫女なる事知れ、直ちに同家に持行きたるに、祖母なる人は聲を限りに慟哭し、泥に塗れたる衣を抱締めて、少時は正躰なかりしといふ。

▲花嫁歸寧して死す 立川村の城下某の一家は、九人一處に押流されて死したるが、中には今治の某家に嫁入りしたる某女の、歸寧してありしが、定めたる日より一日長く留りたるより、之も共に災害に遭ひて、無慘の最期を遂げたりといふ。

▲歸りて見れば家なし 岩井谷に在りし七名の内五名死して、近藤儀兵衛加藤常太郎の二人、九死の内一生を得たるより、少しも早く宅に歸りて父母兄弟に無事な顔を見せて喜ばさんと、立川村に歸着きて見れば、二人の家族は皆溺死して、何處が我家の趾なるか、それさへも知れず、二人は途方に暮れて、少時は茫然自失したりと。

▲通夜堂の流失 立川村字板の本に大師堂ありて其下に通夜堂あり。

可なり大きな建築なるより村民多く此所に難を避けたる處、此所も災害には漏れずして、押流され、無慮十名は生を失ひたるならんと。

▲負傷者某の談話 「幸にして私は片足を土砂に埋められた計りで助かりました。けれども、如何しても、其の土砂の中から足を抜く事が出来ません、不思議でなりませんから、土を掘って貰つて見ると足の抜けない譯です。足の甲の上に大きな石が乗つて居るのですもの」

▲一家三人三段に死す 見花谷に住したる鑛夫山林甚太郎(三十三)といふは、妻のチヨ(九十)と子の峻一(七)とを伴ひて、家を出で、安全なる場所には逃れんとせしが、道路の破壊せるを知らず、暗き中を走行くに、眞先なる甚太郎は、一足、其破壊せる個所に踏入れたるに驚き「危い」と一聲叫びたるが此時既に遅くして、濁流の内に陥り、押流さるゝに、暴風雨の爲め、此聲の聴えざりけむ。チヨも續いて陥り、同じく「危

『』と叫びたる儘、押流され、峻一も亦同じく陥りて流されたりと、當時其傍の岩角に縋着き居たる鑛夫某の直話。

第十報 (九月五日新居濱にて認む)

▲赤羽巡査の談話 同氏は別子銅山駐在の巡査三名の内の一人なるが、今同氏が當夜遭遇したる實況の談話の筆記は下の如し『駐在所には巡査が三人始終參つて居ります。私(赤羽元彌)と久門久七佐伯團藏の二氏とです。佐伯氏は遠村巡回に行つて、未だ歸つて来ませんでしたが。何しろ非常な大雨ですから、今夜あたりは何か變事があるだらうと思ひまして、二人で外に出ると、最う大變です、電柱が彼方にも此方にも閃くです、丸でビュービュー鼠火花を投げる様に、茶碗程の圓さの火の玉が飛ぶのです。夫が岩に打ち當つたかと思ふと其所の邊が、がらがらしく、丸で雷の様な音をして崩れて来るのです、最う然うして居る内に、往來が海です、外套の裾が浮波々々と漂うて、

襦褌を着て居る様です、高い處から瀧の様に落ちて来る、其物凄さといふものは、一通りではありません、村役場の前で二人兩方に別れて、私は一新樓といふ旅宿の前まで来ると、最う一步も進む事が出来ません上からは瀧の水を百條も千條も合せたやうに落ちて来るので、溜りませんから、一新樓の料理場の横手へ躰をピッタりと密接けて居ると、最う其時は水が乳の邊まで来たのです。迎も溜らないので、一新樓の戸を開いて中へ入ると同時に、上から大きな岩石が崩れ落ちて、今まで居た料理場は潰れて仕まつたです、一新樓の中には泊り客や何かで十四五人居たですが、迎も此所には居られませんから、總立で二階へ行かうとしたですが、水は上から落ちて来るので、何故なら崖の下に家があるのですから……けれども、下に居るよりは未だ好いので、一同と共に上りますと、家は動く、それは丸で船に乗つて居る様に動くのです、泣く、叫ぶ、金比羅様を念じる、いや最う大變です、其内

後の岬の處から、開けて呉れ開けて呉れと叫ぶ者がある、開けて遣らうと思つて戸へ手を掛けても、如何しても開きませんでした。後で考へて見ると開かなかつた方が好かつたです。若し開いた處で、岬から、家までは、何程接近して居ても、多少間があるです。向ふは無茶苦茶だから飛込んで来る、落ちたらそれ切りです。又戸を開けた爲に、其所から風を吹込むか、水を流し込まれやうものなら、一人を助ける爲に、十五人が死ぬといふ譯で……同僚の久門氏の話を聞いて見ると、同氏は一軒の家と一所に押流されて首を梁で押へられた爲、顔を水中に漬けながら流されて居る内、手を擴げて居た爲、好い鹽梅の柱様の物に引掛つた。それと同時に、ひよいと深く事が出来て、全く九死の中に一生を得たです。それから其家を何處かで見ると、小學校であつたです、處が此所は高い處にあるのですから大丈夫で、引掛つたのは張盤の支柱でしたので、それから這上つて、備子窓を打ち割つて、

漸く室内に入る事が出来たさうです……水が引いてから救護に奔走しました。いや、如何も非常なもので、足が二本出て居る、中に這んなのがありました。顔の皮がペロリと剥けて腮から下へぶら下つて居るのです。一寸見ると木の株が朽ちたのか何かの様です。ぶら下つて居る皮を上へ冠せて見なければ誰が何やら分らないのです。中には兩方の足がグジャグジャに爲て居て、前でも後へでも、どちらへでも曲るやうに爲つて居たのもありました。……まア何處から手を着て好やら實に困りました。其内見花谷でした、何だか地の底に呼ぶ様な聲が聴えますから、二三人で其見當を掘て見たのです。すると足が上へ向ひて二本出て来たのです。けれども最う死んで居るのかも知れない、死人には逆も拘つて居る譯には行かないと、打遣て、行かうとすると、未だ如何やら聲がする、最少し掘つて見やうと臍の邊まで掘下げると、ピク／＼と腹が動いて居るです。未だ見込があると到頭下まで掘りか

へして引出したのは二十五六の男で、姓名は不明な場合ですから問ひませんでしたが、でも好い都合で、病院へ送つたら助かつたさうです……

▲醫師神尾泰之氏一家の惨死 住友病院の副院長神尾泰之氏(七〇)の家族は妻サヲ子(三三)長男岸雄(三三)二男正之(七〇)三男孝之(四〇)長女松代(三〇)及び下女某との七人なる上に、養母タメ(七十)の避暑 登山し居りしより、都合八人の家族なりしに、一家残らず横死を遂げ、神尾氏と三男孝之との死體は埋没せる地中より掘出したるも、他は何處に流失せしか更に知れず、然るに同氏の死躰と令息の死躰とを見るに、各手首には縋帶を以て名刺を確と結付けてあり、思ふに一家残らず死しても、後に屍の何者かを判別出来るやうにと、一同名刺を結付け居りしならむ。而して神尾氏の死躰の前には細引と行李と取出してあり。行李の中には數多名刺の入れある處より見れば、逆も助からぬと覺悟

の後、死なば諸共と一同に、名刺を結び終り、細引にて八人一處に繋ぎ合さんと爲す一刹那、家屋崩壊して其儘散々に死したるものならんと、人々噂して其要意好きを稱し居れり。

▲孝子の一心母の難を救ふ 立川村は元住友分店のありし處なるが、同所の竹岡俊一氏といふは、住友神戶支店に在勤し、同家には妻女ハル子(五十四)の留り居りしが、子息の筍三氏(十六)は俊一氏と共に神戶に出で神戸尋常中學校に通學爲し居るが、暑中休暇にて歸省し、例年は十日計にて出神する例なるに、當夏は何故にや延期して、二百十日を過ぐるまでは滞留せんと云ひ居りしに、俄然國領川非常の出水にて一家悉く浸水し、母のハル子は必要なる書類を取出さんとして、奥の間に行きたる間に、早や丈より高く水の漬かるに、あはや溺れ死せんとする一刹那、一端逃出したる筍三氏は母の外に出で居らざるに心着き、一命を賭して、浸水せる家屋の中に泳入り、矢庭に母の左手を取りて、

甕の上に引揚げ、身は頬部より右肩に負傷せるにも拘らず、無事に母の一命を救出したるは誠に感ずべき限りなり、而して餘りに強く手を取りし爲か、ハル子の手首は、未だに紫色を呈し居れり。孝子が一心の紀念の痣とも見る可きか。

▲六日間地中に在りて生存す 第三隧道の入口は埋没して、何處が口やら少しも知れざるのみか、前は谷川と爲りて、人の通ふ事も難かりしかば、人夫の一手は前面の岩石を切開きて水を徹し、漸く入口を見出して、發掘に掛りしは三日の午前七時頃なりしが、十時頃に至りて、中より人の聲を發するにぞ、扱は此内に封じ込められたる者ありと覺えたり、人々急ぎに急いで、少しも疾く救出せと計り急ぎ立ちて、漸く十二時頃に活路を開き遣りしに、中よりよろしく、とよるめき出でしは、小澤忠兵衛(三十)政岡龍次郎(三十)政田徳太郎(四十)岡崎初次郎(九十)西阪清市(六十)の五人にして、馬二頭は斃死し居り、右は空氣管の破損し

たる個所より來る、僅の空気に依りて、覺束なくも呼吸し居たるものならんが、地中より出でたる後は、一時に安心して、氣の張弓の緩みし者か、人事不省となり『手がたるいから撫つて呉れ』など囁語の様に言ひ居りしといふ。二十八日の午後の九時より、三日の午前十二時まで、百三十五時間の長さ、地中に在りて生を保ち居りしとは、誠に前代未聞の奇談と言ふ可きなり。

▲五歳の小女唯一人 立川村の瀧本莊太郎(三十)といふは、去る十八日の夜有夫姦の疑を受けて、同村の某に慘殺せられたるより、妻の小シナ(六十)は娘のユキ(五)と一歳に成る男の子との二人を抱へて、悲歎の涙に暮れ居りしが、不意の洪水に小ツナは男の子を抱きたる儘溺死し、ユキは船木野といふ村の親類に行き居りて、此難を遁れたるも、父は刃に、母は水に、弟までが死果て、唯一人現世に遺りたる事、誠に非運此上なき少女が身上といふ可し。

水陸附記す。以上は別子銅山變災の急に馳せて、見る儘、聞く儘、倉皇筆を走らしたるなれば、文章粗雑、見るに足らずと雖も、視察の難、檢分の苦、一方ならざりし間に得たる事實なれば、わざと當時其儘の物を掲げて、毫も加筆せず。

姥島探檢記

第一回

看よ相洋中の奇觀

相摸灘の海上、馬入川の沖合、其所に數個の岩礁から成立つて居る一小島がある。姥島とも謂ひ、尉ヶ島とも言ひ、それから「鬼」とも呼ぶ。鬼の住む岩の意か、鬼ヶ島の名を畧したのであるか、其邊は僕も知らずだ。

姥嶋の總稱の内には、矢ノ根嶋も籠つて居る、平島も含んで居る。大磯と江の島との間に位して居て、悉ちらからも二里以上の海程があらうが、茅ヶ崎の海岸からは一番近くつて、一里半、それより遠くは離れて居らぬ。實に是、相洋中の一孤島——否、一岩礁と言つても好いのであ

る。此姥島、それが何れで奇観であるか。

其形鳥帽子に似たり

それで以て世人に知られて居るのである。其形の奇なるの故を以て、其名の姥島よりも鳥帽子岩の稱を以て、甚だ江湖に名高くあるのだ。

誰に限らぬ、江の島に遊びに行くだらう、其時に、兒ヶ淵の岩頭に立つて、西の方、大磯の沖合を觀るに臨んで、必らず案内者の「あれが名高い鳥帽子岩です」と指示して説明するを聴くであらう。そして其形の如何にも眞の鳥帽子の如く見えるのに合點するであらう。日に向ふ時は白鳥帽子、日に反く時は黒鳥帽子。

世人は鳥帽子岩とのみ記憶して、又其鳥帽子の形のみをして居るやうに考へて居やうが、僕の言ふ相洋中の奇観といふのは、未だ他にあるのだ。世人の知らぬ個處にあるのだ。然らば抑も如何なる個處が奇観であるか。

近く寄りて視上ぐる時

鳥帽子に似たる岩礁の形は變じて一大老翁の後姿に彷彿たりとは、常に漁師等の口から聴くのである。彼の高砂の樹の後姿に似て居るとは、常に古老から傳へて聞くのである。直立せる尉ヶ岩の下には、又横臥せる姥岩のあるあり。其形も亦正の物に似て居るとは、同じ人達の説く處である。

これ等の奇觀の他に、極めて海の平かなるの日、浪が干上つて居る時に、船を舩して其姥島へ遊ぶ時には、矢の根岩の怪奇、平岩の廣大、沙に置去をされた岩の窪の魚拾ひ、岩間の蠣取り、螺取り、鮑取り、中々に以て面白く一日が暮らせるとの事であるが、扱て其海の静かな時といふのが、一年の内に二度か三度で、僅か海上三里足らずの距離でありながら、行きは樂でも歸が困難とか、途中で激浪が吹起るとかで、滅多に船は出せぬのである。従つて人の多くは、つひ鼻の先に見えて居ても、

傍まで近く行かぬのである。急に海が荒れて、七日も八日も歸る事が出来なかつたといふ話や、暗礁に船を破られて、沈没して仕まつたといふ恐ろしい話は、これも常に聴く處である、故に僕も、烏帽子の形としての岩を遠く望むのみで、尉の後姿、姥の寝像、其奇觀を近寄つて見た事の無い一人である。

如何かして行つて見たい、それは僕の家は片瀬川の端の、高ノ臺といふ處にあつて、座敷に居ながら毎日々々、其島を見て居るだけに、是非一度行て見たいと、斯う念じて居たけれど、父も、母も、それは頗る危険であつて、子供なぞの行く處ではないと言つて、言出す度に、留められて、呵られて、如何にしても目的を達する事が出来ないで、今日まで過して居た、けれども、如何かして行きたいものだ、姥島探検は是非決行して見たいと、こればかり始終考へて居た。

第二回

我にわりては大冒険

僕は未だ高等小學校の生徒で、年齢も亦十四歳だから、中々以て、大冒険、大探検、それを企てる事は出来ないで、彼の北洋航海とか、南洋遠征とか、或は又亞弗利加内地を旅行するとか、ナンセンや、クークや、スタンレーのやうな大事業は、未だ力の及ばぬ處であるが、身分相當の冒険——姥島探検は是非仕遂げて見たい。これならば僕にも成効するだらうと、實は内々信じて居るのだ。

姥島、それは、家の裏から眼の前に見えて居る一孤島、それへの遠征もすさまじい、探検といふのも大袈裟だ、荒いと言つても相摸の入海、何んの譯はないやうなもの、扱て我々年齢の少年には、中々以て目的が大きき思はれるのである。恐ろしく困難なるやうに感じられるのである。

が、後日、大いに爲す處あらんと期して居る僕だ。其手始めに、世間から見れば小探検、僕に取つては大冒険の、姥島航海を是非決行して見やうと、日倍しに其念が嵩じて来て、此頃では最う押へる事が出来ないやうに爲つた。

其結果として、父母の命に従はぬのは大の不孝である、萬々承知をして居りながら、秘かに探検の準備をして、又秘かに同志の士を校友の内

同志四人を得たり

僕が募つた探検隊の隊員として、名簿に自記したのは、實に此四人である。皆同校同級で、極めて親友だ。

- 須花松太郎 荒敷岩次郎 下屋仲雄
- 西方藤作

僕、即ち鳥居江一郎を加へて五人、これだけが堅く契約して、出發する

までは決して誰にも知らせぬ事にした。

須花松太郎は十五歳で、一番の年上。兄貴株だけに何事も實直な質で、人と争ひを起すといふやうな事は決して仕ない。

荒敷岩次郎は、僕と同年で十四歳。一通りならぬ亂暴漢で、大膽で、強力で、角力なども一番強い。

下屋仲雄は十二歳で、一番年下で、極病身で、平生音無しくつて、元來冒險な道に行くといふ風の人ではないのだが、僕と非常に仲好しで、僕の行く處へなら、何處へでも行くので、今度も實は危険だから止せと言

つたければ是非一處に行くとの奮發、彼にあつては實に珍らしい事だ。『西方藤作は十三歳で、顔からして滑稽に出來て居るので、教場に居ても人ばかり笑はせて居る。』

さて出發は學校の冬期休暇を幸ひにして、快晴を見定めて出發する事。乗出す船は、裏の片瀬川に繋いでゐる僕の家

の川船。長サが三間と一尺

餘、幅が三尺餘の、極めて吃水の浅い、船底の平かな、川の浅瀬を棹さすに適して居る、其名を軍艦に比して高砂號と呼んで居る、それを解く事にした。

探檢の準備着手

同志は出來た。出發の期日も大略定まつた。船は何時でも拔錨する事が出来る。其處で此上の準備には、武器、食品、飲料、藥品、燃料、漁具、其他は、細引、天幕、毛布、時計、磁石、國旗等である。これ等を親々に知らせずに、一個所に集めて置くといふ事は、中々以て容易の業でないのだ、けれども種々工風して、少しづつ、手分けをして運んだ。それは僕の内の物置小家へ、それは誰れにも見られぬやうに、知らせぬやうに、運んで集めた品々は。

- 短刀一口 ○手斧一挺 ○山刀一本 ○鐵椎一本 ○小刀五本 △米五升 △食鹽一壘 △梅干一瓶 △醬油三合 △砂糖一袋 △清水二桶 ●國旗一旒 ●毛布

- 五枚 ●天幕代用古帆一枚 ●蕙一枚 ●細引三本 ○鍋一個 ○鐵瓶一個 ○火箸一組 ○茶碗五個 ●石油一升 ●炭一籠 ●薪三束 ●燧木十箱 ●蠟燭十本 ○ヤス一本 ○釣道具 ○手網

此他、手帳、筆墨、双眼鏡、時計、磁石、寶丹、萬瘡膏、それから或者は植物採集函を、或者は動物を酒精に漬ける爲めに瓶を、或者は繪を畫く爲めに畫具類を、或者は樂隊笛のフリユ

トを持來つた。これで殆ど準備が整ふた、が、さて、これだけの物品と同勢五人、それが吃水頗る浅く、船体大ならぬ高砂號で、此邊での荒海たる姥島附近へ漕出すといふ事、随分無謀と言つても好いのである。

第三回

高砂號解纜、探檢隊出發

十二月二十九日——頗る天氣が快晴であつて、沖に帆が見え、岸に地引網の引手が見える。寒くはあるが、風の無いのが何よりだ。今日を脱れては何の目にかど、期せずして會して、須花松太郎荒敷岩次郎西方藤作下屋伸雄、皆々學校に行く時の洋服の上に、外套を着て、校帽を冠つて、靴を穿いて、中々身支度が凜々しいのだ。僕も其如く同じ扮装で、意氣揚々として家を出た。父母へは誠に濟まぬ事ながら、遠足に行くと呼んで。それから五人の手で、それ／＼に物置から準備の物品を船へ運んで、さア、見付けられない内に少しも早く解纜仕やうといふので、大混亂、中々に物が撈取らぬので、これは何んでも秩序的に遣らねば行かぬ。てんやわんやに爲つてはいけなないと、先づ高砂號を四區に別つて、艦の第一、彼の先棚と稱する處の上には、食器類と飲用の器物、及び食品を置き、其下には武器に、學術用の器具に、雜品等を入れ、それから第二區、即ち先の間と稱する處へは、莖を敷いて、其上へ殘品を悉く

積んで、其上へ古帆を冠せて、水が打込んでも濡れないやうに定め。第三區、彼の胴の間と稱する處には、毛布を敷き、三人座る事にして、それから第四區、彼の艦棚、其處の上には櫓を漕ぐ者一人、其助手として一人、これだけ居る事にした。さて櫓を漕ぐのは十分時毎に交代する事にして、最初が僕、次ぎが須花、それから荒敷、次ぎが西方、それから下屋と定めたが、下屋は弱いからとて五分として呉れと歎願し、荒敷がそれで、十五分續けやうといふ事に爲つた。其他役員を定めなければならぬ。銘々部署を定めて置かなければならぬのだが、それはいづれ沖へ出てからでも好い、今は急いで、兎にも角にも片瀬川を下つて仕まはなければ、父母に呼戻されて、呵られるといふ恐れがあるからと、いよく解纜したのが午前第九時三十五分。皆々小聲で『探検隊萬歳!!!』

片瀬川の流に從ふて、未だ櫓は立たぬから棹を張りながら、急ぎ急ぎ大急ぎで下つて行くに、多年の意志が今日貫徹する事が出来るかと思ふと、嬉しくつてく耐らない。何んでも早く行きませうと、僕はグングン棹を張つて、今や片瀬川の川口を出て、江の島の海へ出やうとする時、後の方から。

「おい、おい——」

と大きな聲で呼ぶ者がある。失策つた、家の者に見着けられたか、呼戻されて呵られるのか、と皆一同蒼白な顔をして、前にはかり氣を取られて居たのが、急に後の方を振り向いて見ると。

立派なる一紳士

短外套の上に彈丸帯を締めて、右の肩から二連發の村田銃を提げて、左の肩からは餌物袋を掛けて居る。半ズボンに脚半に草鞋を穿いて、如何にも見輕の扮装だが、さて此人は何者か。一行の内に誰も見たものも

知つた者も無いのである。

すると其紳士は、彼から先づハンチングの帽を取つて。

「貴郎方は何處へ行くのですか」

と問ふた。

僕は答へた。

「姥嶋へ」

「姥嶋とは……」

「烏帽子岩の事です」

「嗚呼、彼の烏帽子岩。然うですか……私も行きたいな。如何です、甚だ唐突な申出ですが、私を載せて行つて呉れませんか」

「えッ、貴郎を……」

それは未だ胸の間に一人位居る事が出来ぬでもないが、吃水が頗る淺い高砂號だ。其様に重くなつては沈む——沈む事もあるまいが、少しく高

い波が立つと、海水を打込まれる恐れがあるので、僕も、他の隊員も、其點を考へて返辭に躊躇して居た。其間に船は流れる、紳士は岸を走りながら。

「是非連れて行つて被下い、東京からわざわざ来たのですが、雀一羽も取れないので、これから漁師でも備つて、江の嶋の外側を一週でも仕やうかと思つて居たのですが……幸ひだ、彼の烏帽子岩……あれあれ此所から見ても雪の様に眞白に見えるぢやア有りませんか、彼は皆、鳥の糞ですせ。彼を見ても鳥の澤山居る事は知れて居ますのに……連れて行つて被下れば、其代りに、取れた鳥を、諸君に上げますせ、澤山！」

僕にしる、他の隊員にしる、實は鐵砲が持たたくつて、仕やうがないので、早く成人したら、鐵砲を買ひませうや。早く鐵砲が持てる程の年頃になりませうやと、それはッカリ夢想して居て、それで近所へ銃獵者が

來ると、何處までも尾いて行つて、鳩の居る巢を教えたり、鴨の來る沼を教えたりして、見物に時を費やして居る者だ、實は今度の探檢にも、是非銃か短銃かを持つて行きたいと、思はぬでもなかつたのだが、子供の身のそれも出來ず。止むを得ず出發した、今、銃獵の紳士が烏帽子岩まで同行さして呉れるとは、以外の補助を受けたやうに思はれて、ここでこれは同行をゆるした方が好かろうと、斯う自分では心に定めて、これを四人に謀ると、皆いづれも賛成で、我々は銃といふ武器が出來れば、最う欠點の無い立派な探檢隊だと、喜び勇んで、そして紳士の便乗を許す事にした。

既にして全く川口を出て江の嶋の海に乗出したので、棹は櫓に代り、僕には須花が代つて、船を遣る事に爲つた。須花の助手は荒敷である。僕と紳士とは胴の間に座した。其處で僕は其紳士とゆるやかに語る事が

出来た。

紳士の姓名は、志賀津浪雄といつて、少年世界の特別寄書家ださうで、便乗をゆるされた禮に、今度の紀行文を是非、少年世界へ載せて貰へるやうに周旋するとの事で、皆共に一層の勇氣を起した。

何んにしても此所まで漕出せば、大丈夫で、最う呼戻される恐れもなし、又心配して居た船艙の沈没、存外浮泛力が強くあつて、浪を打込まれるといふやうな事も無い。

須花は一生懸命に漕いで行くので、中々に進行が疾いが、連れて左右に動揺するには困つた。

砥上ヶ原沖へ出れば、最う彼の姥嶋が見える。それは遙かの沖の方に、極めて小さく見えて居る。下屋は繪が好きなので、早や寫生帖を出して、そろ／＼と遠く姥嶋を望む圖を畫き初めた。

探検隊員の部署を定む

先づ此海上で、受持の役をそれ／＼に定めやうと、いろ／＼評議をしれた上で、左の如く決定した。

- 一 食事係 (主任 須花松太郎) (助手 下屋 仲雄)
 - 一 魚漁係 (主任 西方 藤作)
 - 一 測量係 (主任 烏居江一郎) (助手 荒敷岩次郎)
 - 一 植物係 (主任 須花松太郎) (助手 下屋 仲雄)
 - 一 天幕係 (主任 荒敷岩次郎) (助手 烏居江一郎)
 - 一 銃獵係 (囑託 志賀津浪雄)
 - 一 動物係 (主任 西方 藤作) (助手 須花松太郎)
 - 一 圖書係 (主任 下屋 仲雄)
- 以上の他に、音楽主任は西方。上陸地撰定者が荒敷。高砂號艦長が僕。總べての顧問役が志賀津氏。藥品擔任が須花。焚火係が荒敷等である。

第四回

海上白鷗の群に遭ふ

荒敷が須花に代つて、十五分間櫓を漕げば、今度は西方が十分、それから下屋が五分、又元に回つて僕が十分。斯くの如くして鶴島沖を過ぎ、

辻堂の沖に近寄つた時に、進行中に高砂號から、左の方二十三十米突の海上に、一大異観が生じた。

それは白鷗の群が、殆ど數百羽、龍卷の如く立騒いで、水面を掠めては飛交ふ其様。紙屋の店に嵐が吹込んだやうで、實に以て珍らしい見物である。流石は銃獵囑托の志賀津氏だけあつて、直ちに村田銃を取出しかけた。此時。

「まア待つて被下し、撃つのは待つて被下し。鳥よりか、最少の得物がありますよ」

斯う叫んだのは魚漁係の西方だ。そして僕に向つて。

「さア早く、少しも早く、あの、あの、鷗の群の真中に船を突入れ給へ。」

「さア早く、何んでも好いから、早く、疾く速く!!!」

僕は烟に巻かれた傾きで、夢中で其方へ船を漕入れると、白鷗は驚いて、

四方八方へ飛んで散つて、何も居らなくなつた。

「如何するのだ、西方」

と人々が訝つて問ふと。

「鳥にがしたつて大丈夫だ。其代りにシコたま取れるのだ」

と洒落ながら、要意して居た手網を、水中に差入れて、ぐツと力を入れて引上げると、這は如何に、銀色潑刺として驚くべき無数のシコ手網に

溢る、ばかり捕り得られた。

一同「魚漁係萬歳!!! 西方萬歳」を唱へたが、如何にして此大漁を得る事が出来たかと、西方から聴いて見ると、海中で及物々々と恐れられて居る鮫や鱧に追掛けられた鮪や鰯や石鰻魚や。それに又追掛けられた小魚の魚潮に、又々追まくられて一團となり、他に逃げ場を失ふて海面へ海面へとせり合ふて居るシコ。此シコの海面で入亂れて居るのを、目敏くも見出すのは白鷗で、これも我を先きに争つて其シコを取り食らふ、其

所を漁師が見る——其處で白鷗の群がつて居る處には、シコが居る。シコシコの居る近所には小魚が居る小魚が居る近所には大物が居ると、斯う見當を着けて、漁に掛るのだが、今は漁の場合でない。故に一寸シコをすくひ上げたばかりだが、他にその道の漁具が有つて、目的が姥嶋行でなかつたなら、鮪の二三本は朝米飯前に釣つて見せたのにと、斯う彼は説明した。西方の得意思ふべしだ。

怪物!!! 大怪物!!!

進むに随つて、姥嶋は次第々々に大きく見え出して、最う一里より遠くはわるまいと思はれる邊まで漕着けた時に、忽ち大絶叫する志賀津氏の聲。

「怪物!!! 怪物!!! あれ——大怪物!!!」

一同慄然として此聲に驚き恐れれた。といふものは、一行の内での年長者で、加之思慮なる好紳士の志賀津氏が、此大絶叫を發せられたので物の

何たるをわきまへされども、最う氣を失ひ、心を動かし、生きたる心地なくして縮まりながら。

「何處に怪物が……志賀津さん、何處に怪物が……」

「あれ、彼處に……それ。今、首を持上げた」
 指示す方の浪間を見ると、何んだ、つまらない、それは彼の漁師がナワを流してある浮標の（樽の形をして、大きさは飯櫃の如し）出沒して居るのであつて、敢えて怪物でも何んでもない。志賀津氏は近眼である。そして海邊に馴れて居らぬから、それで怪物と見過まつたのであらう。僕等は其事を説明した、志賀津氏もそれと知つて、果ては大笑ひと爲つた。

少時して又怪物? 浮標?

間もなく又々浪間に出沒する物がある、例の浮標であらうと、格別注意もせず其方に漕いで行くと、今度こそは正しく怪物である。嗚呼實に

海邊に成長した僕等ではあるが、初めて見る大怪物!!!
見よ、其飯櫃大の——只の大きさではない、角力取の臺處にあるやうな
飯櫃、それと殆ど同じ大きさの浮標、それと見まがふばかりの怪物の首
が、にゅッとはかり浪間から面を出して、此方の船の方を一睨したので
あるから、驚かざるを得ずである。

「何んだ、何んだ、何んだらうか。我々の船に向つて危害を興へは仕な
いだらうか」

と皆々心配して居る中に、動物係の西方は、例の動物通を振廻はさうと
思つて、頻りに其正躰を見届けやうとして居る内に、沖の高浪のうねり
が此所まで傳はつて、此等の船の邊が谷の様に低く、向ふの怪物の居る
邊が山の様に高く爲つた時に、先には首から上ばかり見えて居た大怪
物の總躰が、明かに見る事が出来て、近眼の志賀津氏、海邊の事情に暗
い文學者、其人が先づ斯う説き出した。

「あれは海龜ですよ。南洋へ行くどわんなのは澤山居るさうです。今の
は甲が疊の數二枚分もありましたらうか。此邊には珍らしい大きさで
すね。卵生動物としては随分大きく成長する方です。元來相摸灘附
近は、暖流の餘波が注入して居ると見えて、熱帯地方の動物か、まゝ
繁殖して居るです……しかし、彼の大龜に限つて、決して人に危害
を興へるやうな事は仕ないから、安心なもので、漁師なども『親爺』と
稱して、會々網に掛つても、酒を呑ました上で、放して遣るさうです
ね。が、若し彼を捕へた處で、何んに爲るかど問はれたら、中々以て
逃がしてやるなど、そんな勿躰ない事は出来たものではない。先づ
甲良は御存じの通り、いろ／＼の細工物に用ゐられるし。肉を食ふに、
其味尤も美とある。それから肉身の膏油を絞れば、少からぬ魚燈の原
料を得るといふ事で、遠い南洋諸嶋は論せず、現に小笠原嶼邊でも、
海龜の漁に従事して居る人が多いさうです。此邊——別して江の嶋附

近では、辨天様の何んとかだと言つて、非常に尊敬して居るさうです
 から……既に江の嶋の山號が金龜山なんぞ、言つて——旅宿にも金龜
 樓なんていふのが有つて、大層大事にして居るから、彼の海龜に取つ
 ては幸福です」

海邊の事情に暗い志賀津氏が、此説明、これ恐らくは眼に見た書籍上の
 智識に、耳に聞いた世間話を加へた上での話であらうが、中々以て委し
 い事で、動物博士の我々の西方も、これには閉口の傾きであつた。
 此長い話の内に、海龜は見えなくなる。船は段々進んで、近寄れば益々
 高く大きな鳥帽子岩。其根に碎ける激浪の白さが、手に取る如く見え
 出した。

第五回

嗚呼偉なるかな姥嶋

嗚呼偉なるかな姥嶋!!! 其深さ知る可からざる海洋の只中に、流るゝ事な
 く、沈む事なく、恰も潮流を平砂の如くに踏締めて、泰然として海波の
 上に突立たるは、尉ヶ岩である。誰かこれを言初めたか、雄姿堂々たる
 巨人石、少しく前に龜みたる如き風情のなかつたなら、腰の曲つた老翁
 に比しはせざらんものを。さるにても似て居る、それは能く肖て居る、
 繪畫や彫刻で見えて知つて居る高砂の尉の後姿、頭部の邊から、肩の兩端、
 脊筋の皺の具合から、大口を穿いて居る驥の様子。實にそれは人が手を
 入れて造つたのでは無いかと思はれる程で、海魔が、潮の刀、浪の鑿、
 世になき力を揮つて仕上げたものとは、如何しても信じられぬ位。これ
 を遠くから眺めて鳥帽子の形と見立てるのは、近く寄つて尉の姿と拜す
 るの奇觀に及ばざる千萬である。此尉ヶ岩の足下に續いて、西々北の方
 かに枕しながら、これも波間に悠然として横臥して居るのは、姥岩である。
 が、これはほんの尉ヶ岩に對しての姥の名で、似たりと見れば其様に眼

に入れど、これは尉ヶ岩の如き酷肖は認められぬ。
 尉ヶ岩の手前に百疊敷見たやうな平かなる岩がある。これが彼の平岩であつて、此平岩に對して、恰も灣形を爲しながら、奇礁が飛びくんに擴がつて居る。

此奇礁、それは鐵色を爲して、其形は鰐魚の牙の如く又鋸の刃の如く、一見人をして戰慄せしめるばかりで、其頂の劔の如く鋭き上に、若し激浪に持上げられたる船底を觸れやうものならば、忽ち嚙破られるのは疑ふ可からざるものだ。これ問はずして其矢の根岩たる事が知れる。虚言ではない、實説だ。ゴンゾウ鯨が此奇礁の上に打上げられて、腹を突破られて死んで居たといふ事、それは誰でも知つて居るのだ。

此他様々の形をして居る奇礁怪岩が、時の干潮であるだけに、諸所に現出して、其面白さ——よりは恐ろしさ『鬼』とはこれを言ふのか。矢の根岩は劔の山か。平岩は地獄の庭か。尉と姥とは日出度の景色に見立ての

稱で、一方から見れば、懸衣翁、脱衣婆、とも謂ひつべしだ。
 さて斯くの如く平岩、尉ヶ岩、姥岩、矢の根岩、其他の諸岩が斷續して取圍んで居るので、其中間は恰も港灣の如く、其周囲の諸岩は彼のボリ子シア群嶋に見る珊瑚嶋の環嶋の様に思はれる。けれども、其岩質は恐らく火山嶋の物であらう。

上陸地の撰定

一行を載せたる高砂號、それが姥嶋を距る三四町。其所から前記の觀測が出来来るまでの邊に進んだ時には、潮流と風向との加減で、非常に動搖して、一打二打浪頭を打込まれたが、最う姥嶋が近いので、誰しも立騒ぐやうな事はなかつた。

平岩の出端と矢の根岩の突鼻と、恰も兩方から手を出して居るやうな灣口？を乗入ると、環島の内部の事とて、浪も風も以外に静かで、少しの動搖も爲ぬやうになつた。最う大丈夫だ。

さア上陸地の撰定、荒敷の任務だ。
荒敷は一聲。

『平岩』

如何にも平岩の中期に、自然の船着場らしい處が見える。艦長たる僕は則ち撰定者の言に随ふて、其方へ艦を向けた。

此時荒敷岩次郎は、日の丸の國旗を取出して、左の手に押立て、右の手には纜を持つて、船頭に直立して、平岩の岸に着くや否や、向ふへ飛降りて高砂號を繋留する用意を整へて居る。

しがし、此所に困難なのは、如何に灣内浪静かであるとは云つても、相摸灘の只中たる資格は欠いて居ないので、汐の上下の急なる事は言ふまでも無い事である。平岩の岸に水の着くのも、絶えず二三尺の差を生じて居るので、高低常ならぬだけに、中々船を寄せるのが危険である。あまり勢ひ好く漕着けると、岩の鼻へ艦を打上げられて、艦が反動を受け

て海中に沈んで、下手をまごつくど轉覆するのであるから、滅多には進まれぬ。

巧みに汐に乗つて進めば、船の全躰を岩の上に載せて呉れるので、柵の上に物を置くやうに極めて安全であつて。汐が引去つても轉覆はせぬ。それで又浪が押冠せて來たらば、其彈弓に今度は汐の侵さぬ岩の方へ引上げて仕まへば、それで全くの無事が得られるのであるから、この所七分三分のかね合ひ、輕業をするのと違はぬのである。

平岩の上陸

引いては寄せ、寄せては引く、汐の上下の氣合を計つて、幕地に船を進めた。首尾好く全躰を岩の上に乗上げた。間もなく、載せた儘で汐は引去る。再び打寄せるそれまで待たず、一同岩の上に飛降りた。荒敷が無論先鋒だ。

再び汐は來つた、其勢ひに乗じて皆荒敷が持つて居る纜に絶つて、力を

協せて、えい／＼と引いた。

高砂號は無事安全なる岩上に置かる、事が出来、さて探検隊一同は、茲に目的を達する事を得、其喜ばしさは如何ばかりぞ。志賀津氏までも満面に笑を含んで、僕等が國旗の下に集まつて萬歳を唱へた聲に、一處に快く和せられた。時に是午前第十一時五十分、片瀬川を發してから二時間と十五分を費したばかりで、先づ速力の遅い方ではなかつた。

第六回

岩陰の舍營

これから多忙なのは天幕係で、續いて繁忙なのは食事係だ。荒敷と僕とは、先づ平岩の中央、其處に自然の風避けの如き岩がある。其陰に地を相して、先づ櫓と棹とヤス竿等を持つて来て、それを組合せて岩から岩へ渡して、その上へ天幕代用の古帆を張つて、屋根と爲し、

其下へ藁を敷いて、それから毛布を敷並べて、これで粗雑なる舍營が出来た。

食事係の須花に下屋は、岩の窪んだ處を見付けて、其處を竈に見立て、先づ第一に火を作らねば寒くていかぬといふので、薪の二三本組合せた上へ、石油を振蒔いて、燧本を摩つて、點けると、ぱつと燃上たので、先づ一同これを取圍んで、暖を取りながら、代り／＼荷物を天幕内に運んだ。其内炭に火を移して湯を沸かすやら、鍋で米飯を爨くやら、西方が捕つたシコを煮るやら、須花と下屋との盡力は一通りでない。最う十二時を過ぎて、一時近くなつて居るから、兎に角一同晝飯にして、然る上で探検に取掛らうと、一同天幕内に入つた。シコが中々美味しく煮えて居るので、大喝采だ。志賀津氏は旅行用の水入に、ブランチーを詰めて持つて居られて、それを我々に勧められた。あ

まり酒は好ぬが、でも場合が場合だけに、皆一口づゝ飲んだ。
 快談湧くが如き内に、食事を終つて、さアこれからが大目的の實行だと、
 一同天幕から外へ出やうとした時に、頗る意外

探検隊以外に無人の境

たる此平岩の上に、何物の來つて住むなるか、後の岩影に奇聲を發する
 者がある。

何んだらう、怪しむべしだ、それ、見よ、調べよ、と荒敷が真先に短刀
 を手にして飛出すと、我も我もと悉く飛出て、奇聲の源に駈寄つて見る
 と、這は抑も亦、不思議なることよ。

其所に呻吟せる一少年あり

岩と岩との間に狹まりながら、息も絶々に唸つて居る一人の少年。それ
 は漁師の子供らしく見えるのが、裸躰のまゝ、今にも死さうにして横はつ
 て居る、如何したのだらう、如何して此所に居るのだらう。意外此上も

ない事で、頗るには誰一人口を開く者がなかつたが、漸くにして志賀津氏
 が。

『なにしろ、これは斯うして置いては不可。恐らくは難船して此所へ漂
 着したのであらう。兎も角も天幕内へ入れて、躰を暖めて遣つて、寶
 丹——いや／＼それよりは先づブランデーを少量飲まして、後に寶丹
 を……で少しく寐かして置くが好いでせう。さア／＼早く』

と急ぎ立てられて、それだ、其事だ、と荒敷と僕とで裸體少年を担上げ
 て、天幕内へ運んで、志賀津氏がプランを口へ注入れる。須花が毛布を
 着せて遣る。皆で種々に介抱した上、静臥させる爲に、下屋を一人看護
 人に残して、其他は先づ平岩全部の探検と出掛けた。

平岩の觀測、並びに奇觀

巖には平岩を地獄の庭と喩へた、けれども斯く岩上來て見れば、實に
 樂園で、我等は嶋臺の上に遊んで居る龜だ鶴だ。

平岩の面積は大概三百五十坪の餘もあらうか。干満の潮加減で、一定の廣大を語る事は出来ぬが、東端から西端までが、複歩七十六歩半あつたから、これを計算して見ると殆ど百米突で、これを平岩の長さとする。それから南端から北端までは、個處に依つて長短の差が甚しく、迎も完然な測量は僕の如き者には迎も出来ないで、ほんの目安で見積つたのだから、素より間違のあるのは仕方ない事だ。

平岩の南面にも、船を着けるに適當の個處があるが、外洋に向つて居るので、浪が頗る荒い。けれども平岩を嶋とすれば、港灣と稱しても好い程立派なもので、今假りに平岩には港灣が南北兩端にあるとすれば、其岩の割目に汐の差入るゝ個處のあるのを目して、河流があるといふ事も言へる。又岩の窪んだ處に、海水の溜つて居るのを指して湖水があるといふ事も出来る。又其岩角の高い處を示して、山があるとも語れる。それから、海草の島、蠣の田、正に是一嶋嶼の雛形として見る事も出来るのだ。

さて其「河流」實に其河幅こそ狭くて、一またぎに跨がられる程だけれど、其深さは實に又海の深さと同じであるのだ。僕は此位な奇觀は多くあるまいと思ふ。

又其「湖水」の、周圍は僅かに三四間有るか無しだ。けれども上沙の引く時に、取残されて魚族の、嶋鯛、テウ鯛、ヒゲ鯛、などの澤山に游泳して居る事、水産博覽會の魚族館も斯くやと思はれて、是又奇觀の一つである。

動物研究の西方、植物採集の須花、共に熱心に其道に力を盡して、珍奇な物を、アルコ、ル瓶に、採集函に、それ／＼に取入れて喜んで居る、中にも西方は魚漁の任務があるので、傍、蠣や螺を取集めたり「湖水」中の魚を汕ふたりして居る。須花はこれを食事係の任務の方から助けて居る。

荒敷は志賀津氏に随ふて、頻りに鳥の方へ目を注ぎ。

『あれ〜彼處に鶉が居ます』

なぞ騒いで居る。

志賀津氏は失望の面持で、僕に向つて。

『折角此處まで來たのですが、如何もチト失望ですね。御覽なさい、彼の尉ヶ岩ですね。遠くから見ると眞白で、丸で雪が積つて居るやうに思はれるものですから、屹度彼の硫黄嶋群嶋の内の、玉置嶋のやうに、鳥の糞が積つて眞白に見えるのだらうと思つたら、大違ひ。灰色粘土板岩の海水に晒されたのが、日光の反射で、それで遠くからは眞白に見えるのですねえ。此分ではあまり鳥は多く居ますまいよ』
此言で初めて氣が着いて見ると、成程鳥の糞で眞白だとの、これまでの人の話は、全くの想像から起つたので、實際の異なる事が今日發見された、我等探検隊に取つては最も大いなる發見である。

志賀津氏は又矢の根岩の方を指示して。

『けれども、全く失望には終りません。御覽なさい、彼の矢の根岩……鐵色の黒い處へ浪が打掛つて眞白に碎ける——碎けては又本の深緑の色になる。それで、白い色が黒い物を包まう〜として、包みそこねて碎けて仕まふ。其黒い物の頂上、鋸の齒の様な鋭い上に、これは又えらい、散らず、碎けず、永い間、落ちずに留まつて居る白色。あれは浪ぢやアありません。皆、白鷗です。なんと澤山居るぢやアありませんか……私は後に船を借りて、彼方へ撃ちに行きたいものです』

第七回

尉ヶ岩の探検に向ふ

平岩を隈なく巡見して、一先づ天幕内へ歸つて見ると、彼の少年は餘程

元氣を回復して居た。

僕と荒敷との二人で、尉ヶ岩の測量に行く事とした。平岩と尉ヶ岩との間は海水で切れて居て、其間が六七間ある。

これを渡るのにわざと船を出すにも及ばぬ。なに、寒中だつて構ふものか、泳いで行かうと、荒敷が言出したので、僕も賛成して、服を脱いで、襦袢一枚に爲つて、細引二本と鐵椎とを荒敷が持ち、僕は國旗を持つて、人々が留めるのも聴かずに立出でた。

それでは行を盛んにするぞと言つて、平岩の端まで一同で送つて来て呉れて、樂隊の奏樂と稱して、西方がフリエートを吹き出せば、志賀津氏は祝砲を放つと言つて、三發ばかり海に向つて撃たれた。

この勢ひに乗じて、荒敷は細引と鐵椎とを片手に持ち、僕は國旗を片手に持つた儘、さんぶとばかり飛込んだ。

其冷たさ、其寒さ。けれども氣が張つて居るので、勇んで彼は手の物を

流さずに、僕は國旗を濡らさずに、片手で泳切つて烏帽子岩——尉ヶ岩の根に初めて着いた。

攀登る尉ヶ岩

第一に着手すべきは尉ヶ岩の高サを量るのである。五丈何尺と傳へてあるが、見た處では、それ以上に思はれるので、二人して頂上まで攀登り、國旗を岩頭に樹て、それから細引を下まで落して、そして尺數を取る事に仕やうと、背面に回つて、稍々勾配の急ならぬ處を撰び、僕から先づ國旗を捧げながら、岩角を踏締め、津落ちぬやうに注意して、兎も角も三間餘の高サまで進んだけれど、さア如何しても、これから先さへは

一歩たりとも、登る事が出来ぬ。

彼の尉の巨像の腰の邊までは、達したけれど、これから先きの背筋とも稱すべき處には、爪で穿つた程の穴もないので、手懸りもなければ、足溜りもあらぬ、けれども岩質が頗る脆弱なので、鐵椎で踏段を造りつゝ、

行くには差支へぬ。それで今度は荒敷が先きに立つて、鐵椎でこつ／＼遣りながら、殆ど屏風を立てたやうな所を攀登つて行く内に、頂上間近かく達する事が出来て、今一奮發で目的を遂げるといふ所まで上つたけれど、最うこれからは如何しても攀ぢられぬ。大膽無謀の荒敷さへも、躊躇して見えたので。

「最う此所まで来れば好いちやないか」
と僕は言つた。

「なに、君、今一ト息だ……これで止すといふ事があるものか」

「でも、最う、逆も鐵椎でも駄目らしいぢやないか。見給へ、丸で雲の上へ登つて行くやうで、此上の危険は無い……」

「待ち給へ、僕に奇策があるので。此細引で輪をこしらえて、好いかね、それをボンと上へ投げるのだ。すると、尉の頭を潜つて首の邊へ箝まるさ。それ、然うすれば、此方に残つて居る手許の細引を手繰り

ながら、大峰參りが鐵の鎖に縋つて、絶壁を登るやうにして行くのに、何んの危険があるものか」

「それは至極名策のやうだが、又考直して見ると、君、尉の首だね、此所から見るとそんなに大きくは見えないけれど、實際は中々以て小くはあるまいせ。巧く細引の輪が箝まれば好いが……」

「其處は僕の手練にありさ、まア見て居給へ」

と言ひながら、荒敷は手早く細引を結んで大いなる輪を造り、それを上に向つて、尉の頭から冠せるやうに投げた一刹那。足を踏濼べらして荒敷が落下する押に打たれて、僕も共に轉がり出し、岩に頭を打付けて微塵に碎ける處を、二人共幸ひにして、海面に陥入つたので、怪我は無かつたが、沙水の鹹いのを呑んで、危く土左衛門となる處を、辛うじて又姥岩の方へ泳ぎ着いて、苦しさ息をホツと吐いた。

姥岩其他二三の岩礁

序だから探検したが、格別の事は無い。扱て又歸つて、尉ヶ岩——高サは逆も量られぬから、今度は根下の周圍を計算した。

復歩五十歩であるから、十九間餘、二十間足らずであらう。これだけは分つたが、實に残念なのは高尺を計る事が出来ぬ一時だ。我々一行に數學の達して居る者が無い爲に、見すく標的を睨んで居ても、如何する事も成らぬ。後に志賀津氏も、此道は大嫌ひだとして頭を抱へて笑はれた。

第八回

漂流少年徳吉の事

一先づ平岩の舍營に歸つて見ると、此所では彼の裸躰少年が、須花の外套を着て、そして矢張毛布に包まれて横臥しては居るけれども餘程元氣が出たと見えて、眼を見開いて、頻りに四邊を見廻はして居た。僕と荒敷とは襦衣が濡れて居るので、暖を取りながら乾かさうと、天幕

外の焚火に向つて當つて居ると、其處へ來たのが須花で。

「やッ能く怪我を仕なかつたね、此方から見て居て肝を縮めたよ」

「や、それは好いが、彼の子供も大分好いやうだねえ」

「あッ口がさけたよ。そいで、いろく話したよ。あれはね鶴沼の漁師の息子でね、石上徳吉と言つてね、十五だどさ。それが三四人で漁に出て、途中で難船してね、やッと板子につかまつて、一人で此平岩まで流れ着いたのだッて、今日から三日前に……で、飲まず食はずだから溜らない。あんなに弱つたのだアね。最少し打遣つて置けば死ぬる處だ」

「然うかい、何しろ漂流者を救ふたのは探検隊に取つて名譽だね」

「それは然うと、彼の矢の根岩に居る鳥を、是非撃ちたいと志賀津さんが言つて、お出でなさるから、今度は君達で留守をして居て呉れ給へ。僕と西方と、それから下屋とで、志賀津氏を載せて高砂號で行つ

て来るから』

『よろしい、然う仕給へ』

須花は西方下屋の二人と共に、志賀津氏を載せて、岩上の高砂號を海へ下して、そして矢の根岩の方へ漕いで行つた。

僕と荒敷とは天幕内に入つて、徳吉の看病がたゞ、自分も服を着けて、毛布を冠つて、横に爲つたが、二人共に疲勞が出たのか、遠くで響く銃聲を聞きながら、つひとろ／＼と眠つて仕まつた。

大變!!! 大變!!! 大變!!!

呼び起されて眼を覺して見ると、銃獵隊は皆歸つて居て、天幕の外には、白鷗が五六羽に鶺鴒が三羽、中々の大獵だ。

『やッ大變に捕れたね』

『それ處ぢやアない、大變だよ』

と志賀津氏は叫んだ。

『如何したのです』

と眼を摩りながら僕は問ふた。

『何んでも好いから、起きて、まア、天幕の外へ出て見給へ』

と急立てられたので、何事かと思つて、慌てゝ走出て見ると、如何にも大變!!!

先きの程までは左程まで悪くなかつた海上が俄かに荒狂ひ、猛り立つて、浪が躍る其様の恐ろしさ。のみならず、東南風が吹荒んで、岩陰を出れば吹飛されそうだ。

何處を見ても船一艘も見えず、伊豆の方には怪しい雲が湧出て、今にも雨らしく。これには殆ど僕も途方に暮れた。

年下の、加之、虚弱なる下屋は泣聲を出して。

『これぢや歸る事が出来ない』

寔に下屋が言ふまでもなく、此荒模様では歸る事が出来ない。三挺櫓の

漁船でも覺束ないのに、況してや川船の高砂號、徳吉を合すれば七人を載せて、如何して陸地まで着かれやうぞ。陰險極まりのない悪い海!!! 荒敷はそれにも平氣で。

「なに、歸れなければ此所に泊るさ」

止むを得ずんば平岩に一泊せねばならぬ、けれども、此荒が一日で濟めば好いが、二日も三日も續いたら如何しやう。

何しろ緊急會議を開かねばならぬ。

志賀津氏を議長にして、心配の極、顔の血の色を失ふたる一隊。但し荒敷は平氣だ。これがあるく説を持出した結果。いよく平岩に泊る事と定めた。

が、平岩が満潮になれば、海中に没する事はないかとの注意も出たが、三日も此所に居た徳吉の實驗の上では、其憂がないとの事で、安心してそれを決した。

斯うなると食事の節儉を第一に爲し、舎營の堅固を第二と仕て、それから高砂號を流失せぬ注意、暖料、飲水、等を浪費せぬ工風、其等を厲行せねばならぬ。

流木を拾集める役目と、礪穀を破つて中身を取る役目と、皆それ〜に働かねばならぬ。

夜に爲つたらば一人づゝ交代で、哨兵の役目を勤めて、非常の變に備へねばならぬ。

これから別して多忙なのは、食事係の須花に下屋だ。志賀津氏が撃つた鷗を料理したり、海水で米を洗つたり、それも米飯を饜くと米が足りなくなつて、萬一、二日も三日も立籠る場合には、忽ちに米の欠乏を訴へるからと、粥にして啜る事に定めるやら。

西方に荒敷は礪を澤山取りて、礪腹を脹らせるのだと奔走し、志賀津氏と僕とは流木を集めるべく盡力したが、流木の濡れて居るのよりは、浪

で岩の上に打上げられて少しでも乾いて居るのを、心掛けて集めたが、存外澤山に拾へたので、これに持つて来た薪を加へれば、三四日は大丈夫である。

志賀津氏の工風で、岩風呂を立てる事にした。それは岩の窪んで水溜りに成つて居る處の海水を酌干して仕まつて、其中でどんぐり火を焚いて、四面の岩の火のやうに焼けて居る處へ海水を程好く汲込むのである。斯くの如くして最好の海水温浴を作らへて、一同代るく浴する事が出来た。平岩で湯に入るなど、這んな洒落た事はあるまい。

一夜を明かす様々の支度

斯うして居る内に、日は全く暮れた。海は益々荒狂ふて、岩に碎ける浪の響きの恐ろしさは、實に今にも尉ヶ岩を逆様に吹向けるかと疑はれる位。

野營の支度として、一同高砂號を引上げ、岩の上を漕らして、舍營の横

手へ持つて来て、入口の風避にした。最初、天幕内の下に敷いた藎を取つて、隙間を防ぐこれも風避と爲し、毛布五枚の内の一枚を徳吉に與へ、一枚は下に敷いて、跡の三枚を六人で冠る。則ち一枚に二人づゝだが、一人は當直で起きて居る筈だから、一枚を志賀津氏に着せて、残りの二枚が我々の夜具と定まつた。

蠟燭を採集函の中へ立て點じ、天幕内に圍爐裏然と炭火を熾して、寒を防ぎ、さアこれから食事と仕やうと、須花の腕前を如何にと味はふ事に爲つた。

天幕内の酒宴

湯には入るし、食事には鷗の焼肉、蠣米飯、否、蠣粥、米類よりは蠣の身の方が多いやうなのが前に並んで、此他梅干もある、シヨの殘物もある、中々の御馳走。例に由つて志賀津氏はブランデーを一同に分たれたので、水を割つて、砂糖を入れて、少しづゝ飲廻はしに仕て、元氣をつ

けた。
 一方には、海の荒れて家へ歸られぬといふ心配もあるが、又一方から考へて見ると、こんな面白い事は無いのだ。
 荒敷の強がり、西方の滑稽、志賀津氏の快談、飲みつゝ、食らひつゝ、彼語り、我話し、實は此位愉快な事はなかつた。
 此様な時には、元氣よく賑々しくして、威勢を張らなければいけない。幸ひ漂流者も餘程回復したやうだから、枕下で騒いでも障りにもなるまいと、西方がフリュートを吹く、須花に下屋が軍歌を唱ふ。志賀津氏の詩吟に連れて、荒敷が劍舞——狭い天幕内で短刀を振り回すやらの大盛會、尉ヶ岩も驚いて此方へ向くべく、姥岩も起出して見に来るであらう。平岩始まつての珍らしい盛宴、海若風伯もこれには一步を譲りさうなもの、扱て如何も外は層一層、益々荒狂ふて眞暗なる闇の空に、物凄く風の聲、物恐ろしい浪の音。

第九回

宿直を定む

不寝番の當直の順序は、午後九時から十時までが下屋。十時から十一時三十分までが僕。午前一時までが須花。二時三十分までが志賀津氏、四時までが西方。五時三十分までが荒敷。その後は誰か目の覺めた者と定められた。
 それで一先づ食器等を片付けて、當直者の下屋に時計と短刀とを渡して、外套を一枚餘分に着せて、外へ出し、一同は押合ふて天幕内に眠る事と爲つた。

半夜獨眠らず

僕は一枚の毛布を須花と引張合つて寝る事としたが、扱て眠られ、ばこそ。寒くはあるし、岩の上の痛くはあるし、殊に午睡をしたので猶更に

まどろまれぬ。彼此する内に、直ちに一時間立つて、下屋に代るべき順番と成なつた。

下屋から短刀と時計とを受取つて、外套を重ねて、そして天幕の外へ出た。

寒い、おう寒い。實にそれは面を向ける事が出来ない程だ。

暗い、おう暗い。實にそれは鼻を摘まれても知れない程だ。

恐ろしい、浪。恐ろしい、風。悲しい、鳥の啼き聲。悲しい鳥の、そればかりでない、悲しい僕も。

啼くのは鳥ばかりか、僕も泣く。

今までは大勢起きて居て、面白い話や勇ましい譚をして居たのに、取りまざれて、何事も忘れて居たが、これから先き如何なる事か。

五日も六日も歸られなつて、此所の食ふ物が無くなつたら如何しやう若し又今にも大浪が寄せて来て、平岩が沈んで仕まつたら如何しやう。

これも父母の許可を得ずして、此探検を企てた天罰でもあらうか。

今頃は阿父さんや阿母さんが、僕が歸つて來ぬので心配して、大騒ぎをして居らッしやらう。嗚呼、悪かつた、濟まない事だ。

僕ばかりではない、他の四人の両親や家族、さぞ大心配で居られやう。嗚呼、實に申譯の無い事だ。

冒険家が、こればかりの事で涙をこぼしては如何にも可笑いが……でも、僕は子供だ。

考へれば考へる程悲しくなつて、暗くて見ぬながら、涙で見えぬながら、片瀬の方を見詰て居ると、おや、火の光、星か、否、空は黒雲が満ちて居る。漁火か、否、海は荒れて居る。それでは若しや家の燈火ではあるまいか、よも此所からは見えまいとは思ふが。

交代して寐に就く

時が來たので何の顔も爲す。通常の舉動で須花と代つて、僕は下屋の毛

布の中へ藻潜つて、密と涙を拭いて居ると、下屋も僕には寝たと見せて、何んだか涙を拭いて居るやうだ。中々以て眠られず、須花に代つて志賀津氏の出で行かれたのまでは知つて居るが、其内疲勞のそろく發して、ほんの五六分も眠つたかと思ふ頃に。

俄然、寢耳に轟く銃聲

に驚かされて、飛起きたのは僕ばかりではない、荒敷も、須花も、西方も、下屋も。

何事が起つたるかと慌て外へ走出た五人、異口同音に。

「如何しました、志賀津さん」

「おう、皆、起きましたか……何んでもえらい物を撃留めました」

「えッ撃留めましたか？」

「私が張番して居ると、恐ろしい大きな羽音を響かして、尉ヶ岩の方

から飛んで來ましたから、暗撃に一發放つと、確かに手應へがあつて、

ばつさり落ちたのは平岩の内に相違ない」

「それア愉快ですね、實に大出來ですね」

何しろ火を以て照らしたいけれど、此風では幕外に蠟燭は出されぬ。

其所で西方の頓智で、薪の先きへ石油を打掛けて、急造松明を製し、そ

れに照らして四方を見ると、果せるかな命中!!!

鷺の如き犬鷹一羽、腹部を撃れて死んで居た。

第十回

漂流少年元氣加はる

明くれば三十日——益々海は荒狂ふばかり、此様子では迎も急には静ま

りさうもない。船は一艘も出て居らず、海岸には人一人歩いて居らぬ。双眼鏡の見渡せ

る限り、頼みの綱は無いのである。

それに加へて蒲潮の故か、平岩の面積が心細い程狭まつて居て、岸を打つ飛沫は折節天幕の上へ落ち掛る。

蠲粥例の如く朝飯に充て、足らぬ處を螺の壺焼で我慢をした。

一同勇氣消滅して、志賀津氏の如きも大いに心を痛められ、年甲斐もな

い事だ、僕か留めもせず此所まで諸君と一處に来て、萬一の事があつ

たら、僕一人助かつても、如何して生きて居られやうぞ、なぞ、言はれ

た。

志賀津氏にこんな事を言はれては、益々我々は萎氣るばかり。

昨夜取れた犬鷹を、通例なら珍らしがつて見のだが、誰も打遣つて手を

着ける者が無い。

荒敷でさへ、今日は駄目だ。

然るに彼の漂流少年徳吉は、昨夜の蠲粥に勢を得たか、今朝はめさく

ど元氣が着いて、決して御心配なさいませぬ、尉ヶ岩へは登れずとも、

姥島の頂上へは誰でも行かれる。姥島の頂上へはどんな暴浪でも打上げ

ぬから、若し平岩が危いやうなり、彼處へ移る事に致しませう。食物の

方も、釣道具やヤスなどがあれば大丈夫、何か彼か私が捕つて、決して

皆様を飢へさしはしません。私だつて此處へ着いた時に、泳いで體さへ

疲らして居らなかつたら、彼のやうに腹を空かして弱りはしません。何

か彼か探して食つて居たのですが、最うそれだけの氣力が其時は有りま

せん、それで昨日の始末、それを救はれた御恩は必らず報じますから

と、昨日慰めた者が今日は却つて向ふから慰められた。

大章魚を釣る

晝飯も亦蠲粥炊で、いよゝゝ蠲澤山の米少なだ。直ぐに腹が空つて仕ま

ふ。

此様に節儉しても、五升の米が、最う二升有るか無しになつた。

西方は徳吉と共に平岩の北港、幾分か浪の静な處へ行つて、釣を垂れて、黒鯛三尾と大章魚を一ぱい釣上げた。

木拾ひ、蠣取り、それ等を濟まして、他に所作の無い連中は、別に遊戯とでもないの、章魚入道に玩んで、せめてもの鱒を散じて居た。沖は益々大荒れに荒れて居る中に、海豚の群の遊泳して居るのを見た。

雨雪交々至つて天幕漏る

午後の二時頃から、曇が降出した。

素より不完全なる古帆の天幕、雨が漏つて仕方がない。皆これを防ぐ工風に、頭を痛めて居る此時。西方は得意に爲つて。

「何も心配する事は無いさ、好い工風がある。天幕の下でどんく焚火をするのだ、そして皆取巻いて體をあぶつて居るのだ。然うするとね、いくら濡れても我々の衣服は濡れる跡から直ぐと乾いちまふ』
こんな場合にも西方は滑稽を言つて居る。

けれどもそんな事は實際には行はれぬので、尙もいろくど考案を回らした上で、止むを得ず、高砂號を逆様に伏せて、岩角から岩角へ冠せ渡して、其下へ入つて雨雪を凌ぐ事とした。

コロボツクルが落の葉の下に住むで居るやうで、頗る珍妙であつたけれど、これより他には仕方がないのだ。

これに就いても高砂號が、如何に小さな船であるかが知れるのだ。張板を取扱ふやうに自由自在に出来るとは、信せぬ人もあるであらうが。

此下に居て食事を爲し、それから又一夜を明かさねばならぬのだ。

翌日は最う大晦日だ——何んば何んでも静かになるであらうが、好しや海波が凧いで仕まふとも、魔日と稱して漁師も船頭も決して船を出さぬ

から、他の船に據つて歸るといふ事は迎も望む可からずだ。
七人の命を此高砂號に委せて、危険なる航海を爲ねばならぬのか。
嗚呼、來なかつたら好かつた。

寒い寒の日は暮れて、一層寒い雪の夜と爲つた。船の下の焚火は烟が籠つて燻つて、涙が出る、眼が痛くなる、でも仕方がない。

章魚の煮たのに、例に由つて蠣粥——ブランデーは飲盡したので、アルコールを少量に、水を澤山割つて、無論砂糖を入れて飲んだ。少年の飲酒を咎め給ふな。此様な場合だもの、元氣を酒の力に借らざるを得ざるのである。

非常の大暴浪

宿直の役目は昨夜の通りで、志賀津氏と西方との間に徳吉が加はつた。別して今夜の當直はつらいので、特別に焚火をして居る事にした。午前四十分であつた、當番の徳吉が大聲を發して皆を喚起して。

「さア大變だ、如何も非常の大暴浪になりさうですから、今の内に姥岩へ行きませう。少しの間もまどつては居られません」

流石は漁師の兒で、天候の悪いのを見抜いたと見える。如何で躊躇しやう、一同飛起きて、身支度を仕掛かる一瞬間、火薬庫の破裂したやうな音響と共に、大浪一打を頭から冠つた。頭から冠つたのは、我々の頭ばかりでない、平岩全体が其浪に冠せられたのだ。

最早や迎も命は亡きもの

と覺悟はしても、助かるだけは助かりたい。それは誰しも皆同じ心だ。期せずして一同、今まで屋根として居た高砂號に取着いて、一生懸命に覆して、本の形に直すや疾さ、又一打の大浪に、浮くは船、沈むは平岩。

此刹那に、飛乗るもあり、轉げ入るもあり、船縁に縋り着いて居るものあり、僕は艦へ半分体を乗せて、半分は浪の上に居る。高砂號は其儘平岩を澤落ちたかと思ふと、一度は深味に入つて、艦の方から沈み掛けたが、今度は北の方からの大浪に、ゆらくとゆれて、打

上げられた、それは尉ヶ岩の根方。

「それッ、今ッ、出る、船をッ」

德吉の叫聲は夢中に聽いて、最う狂亂。飛んだのか、轉がつたのか、落ちたのか、打上げられたのか、兎にも角にも尉ヶ岩の根方へ、船の縁を離れて絶着いては居た。

「居るか、鳥居!!!」

「荒敷か……皆、如何したッ」

「下屋も西方も、此所にッ」

「志賀津は、此所だ!!!」

「須花も無事だぞ」

「おう、皆、無事か」

德吉の聲で。

「此所は未だ安心は出來ない、早く、早く、早く、早く、早く、姥岩の方へ……」

と叫んだ時に、高砂號は何處へ行つたか、最う見えなくなつてしまつた。一行は實に命だけ持合せて、他の食品、武器、雜具、悉く失なつてしまつた。

姥岩の頂上に狭い處に七人一處に固まつて、頭から雨雪を冠り、足下を怒濤に洗はれ、寒風に吹きさらされて、夜を明かし。飲まず食はずで、十二月三十一日を過し、明くれば

新年元旦の初日出

を思ひも寄らぬ姥島の岩上で觀て、扱て今にも餓死凍死の二難に濱して居た、危い處を、我等の行衛を心配して探しに出た七挺櫓の救助船に見出されて、無事に片瀬へ歸着する事が出來た。それは最う、夕刻であつた。斯くの如く九死一生の目に遭つたのも、全く父母に告げずして、無謀な探検を企てた、其天罰であらうよ!!!

すべての出来事を有の儘に記して、志賀津氏の校閲をわぶぎつ。

鳥居江一郎謹誌

(をばり)

六甲山鳴動探検記

(E)

六甲山の鳴動が不幸にして彼の往年の磐梯山の如き大破裂の前兆であらうものなら、實に由々しき一大事であるのだ。萬一、萬々一、噴火か噴水かの大災厄が起ると仕た時には、單に山麓の諸町村が火流泥海と爲るのみならず、エス井オ山の破裂にポンペイの市府が埋没した、それ程にもなるまいが、淺間山の噴火に江戸の八百八町が悉く灰土を冠つた、それ處の被害では迎も濟むまい——我が神戸の市は。

風説は云ふ、是は御影で石材を切出す爲に、爆裂薬を使用する、其音響である。他の風説は云ふ、雨後地中の空洞に土砂の陥落する、其音響である。又他の風説は云ふ、これ今日に於て初めて音響を發するにあ

らず。かゝる事は敢て珍らしく無いのである。
 しかしながら、是等は皆頗る薄弱なる推測たるの難を免れぬのである。
 其鳴動、一晝夜の内に十數回、激甚なる時は、戸障子を殆ど脱すまでに
 至るといふので、有馬の浴客は此夏の盛り時に際し、安んじて温泉に臨
 を延べる處ではなく、皆肝を縮めて、下山復下山。有馬開關以來の大椿
 事である。

分署長の調査、測候所長の出張、震災豫防調査會よりも囑托員が出
 張するといふ今日、自分は友人松田琳雨子と共に、六甲山に向つて出發
 し、群盲の大象を探るに均しいか知らぬが、かゝることの智識には乏し
 いながらも、盲目探檢に従事して、多寡の知れたる六甲山、峯と云はず、
 谷と云はず、斷崖麻繩に絶つて下り降る可く、絶壁鐵錐を突さて攀登る
 可し、縦繩無盡に駢廻はりて、岩ヶ根枕苔衣、あらゆる難行苦行の上、
 といふのも凄まじいが、其探檢の有様を、細大漏らさず讀者に報じやう

と思ふ。さらば、諸君、明治卅二年七月二十三日午前第六時二十五分出
 發!!!

(中)

二十三日午前六時二十五分、神戸驛發の瀛車で住吉驛に到る。同行は琳
 雨子なり。輕裝、富士行者の如くある。二人の勇氣は、實に瀛車から降
 りた時が、一番強勢であつた。
 有馬街道を、溪流に沿ひ、山間に入り、次第々々に登つて行くに、強雨
 で崩壊して居る道路を見ても、直ぐに鳴動の結果ではあるまいかと疑ひ、
 松籟又は溪泉の聲を耳にしても、あれが山鳴の音響ではあるまいかと訝
 しむ。風聲鶴唳の氣味で進んで行つたが、登るに従うて景色は佳し、涼
 しくはなるし、鳴動のびく／＼を忘れると同時に、探檢員たるの本分を
 も如何やら忘れさうなのである。啞の茶屋、谷の茶屋、休息所の在る處
 には必らず立寄つたけれど、鳴動に關しては、事實を打明ける程の放膽

な主人が無いの、此方が又細く聴糺す程の小心な流でも無いので、山南の風説は悉皆知らぬ人である。

途中の小観は語る場合で無い。余等が海面を抜く三千餘尺の六甲山頂に到達したのは、午前十一時二十分であつた。

此六甲山頂は、有馬街道の峠を登りつめて、それから降りにならうといふ個所から、左手に當たつて、山上更に山を爲して居る高處。街道からは何程も無いのみならず、さして急峻なる坂でもないから、素通りせずと、是非一度は登つて貰ひたいのである。六甲山の見晴しは實に好いなと、一口に言はずと、同じ通を振廻はすのなら、是非眞實の山頂を究めて貰ひたいのである。兎に角攝津では第一の高山たるには相違ないから。

此所で琳雨子と評議を始めた。

▲有馬町に降りて、人心の恟々を視察す可きか。

▲山中に留つて、鳴動の那邊より来るかを伺ふ可きか。

が、一も二もなく後者に決した。有馬視察は社中別に人有り、初めからの名乗りは、山間の跋涉にあるや明けした。盲目探險が我等の看板であるからは、鼓ヶ瀧のちりからたツばん、それを聴くよりは地理から探訪、此方が肝腎である。

其所で二人は、あらゆる山脈谷々を、唯一目に見降し得らる、六甲山頂の測景標の下に、本陣を構へ、探象流の視察を下さうとする此時。果然、鳴動の第一聲は来れり。然れども驚くに足らず、そは極めて微力なるものなり。遠雷の如き音響を聴くと同時に、僅かに薄弱なる電氣の感したる時の如き小微動を身に覺えたのみだ。

此小鳴動の来りたるは、確かに北東の方である。北東、それは有馬町の方ではないか。

(下)

次に來る可き鳴動を聽ん爲に、琳雨子は山頂の北端に突立て有馬の方を展望して居り、余は山頂の中央に横臥して、身を驗震器の代用と爲した。正午十二時頃、第二の鳴動は來つた。確かに上下動であつて、それは永續したる震動ではなく、一刹那の斷震である。鳴響もあまり大いなる物では無い。琳雨子の見る處では、如何しても鳴動の北東の方から來るといふ事である。

世人は六甲山鳴動と云ふ、これ大いなる誤りである。六甲山にあらざして、有馬附近の鳴動といふに憚らぬのである。

何故ならば、余等は第二の鳴動の後、有馬側の峠を降つた茶屋に水を貰ひに往つた時に、其所の老爺から斯ういふ事を聞いたので。

「今のは二度とも大さう御座いましたな。此所に並べてある麥酒の壺が、鉢合をして鳴つた位ですから……」

して見ると、山頂よりは谷底、南面よりは北面、平ツたく言へば、有馬

町の方はど、大きく劇しく鳴動するものと見えるのだ。

震源地が六甲山頂でなくて、有馬の谷底の方、と斯う見當が着いて見ると、何時までも山頂に居るにも當らず、又、時間に制縛せられて居る我等であるから、他に向つて探検に向はねば爲らぬのである。

其所で、又、有馬行といふ説も出たが、それよりは、御影、唐櫃の山系を傳うて、摩耶山に抜けるまで、此間を探検して見やう、山崩れとの説

もあるから、成るべく、山骨を顯はして居る個處を選んで、踏査仕やうと、再び山頂に立戻つて、此所で行進する方向を考へ、いよいよ路有り

といへば有り無しと云へば無き草原小石原、峯と云はず谷と云はず、野猪の勇を以て進んだ。

右も左も斷崖絶壁、恰も劔の刃を渡る如き處やら上るにも下るにも絶体絶命、地獄の針の山も斯くやと思はれる處やら、小籠や干萱が人の丈より高さ中を潜り、岩と岩と相接して自然の石階を形造つた處を登り、大

蛇の如き木の根に縋り、猛虎の如き岩の上を跨がり、或時は小石と共に谷底へ迂り落ち、或時は飛泉と俱に溪間へ飛込み、久し振で荒行をして、漸く唐櫃山上の外人の別荘が多く建てある、其所へ着いた。此所で鳴動の如何を聴いて見ると、矢張り六甲山あたりと同様に、地震ひ、土鳴るといふ。

唐櫃より摩耶山に到る。此所も亦鳴動す。現に余等が蓮華院にありて、休息する短時間に、二回まで、微なる鳴動を感じた。日は既に暮れんとし、山雨又來りければ、此所で余等の盲目探検を終ることとして、下山、歸宿、時に午後八時過ぎであつた。(明治卅二年七月神戶新聞掲載)(口齒は乙羽君の撮影にして二人の奥下の足下に余等の名を記せる紀念の石標あり)

星 終

明治卅三年十一月廿三日印刷
 明治卅三年十二月廿一日發行

定價金五拾錢

著者 江見忠功

發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎

印刷者 東京市本郷區丸山福山町六番地 水谷景長

印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地 會社博進社工場

不許
 複製

發兌元 博文館

東京市日本橋區本町三丁目

著 君 蔭 水 見 江

說 小



篇 短

全一冊洋裝袖珍紙數四頁餘
正金價三十三錢(版五)郵稅六錢

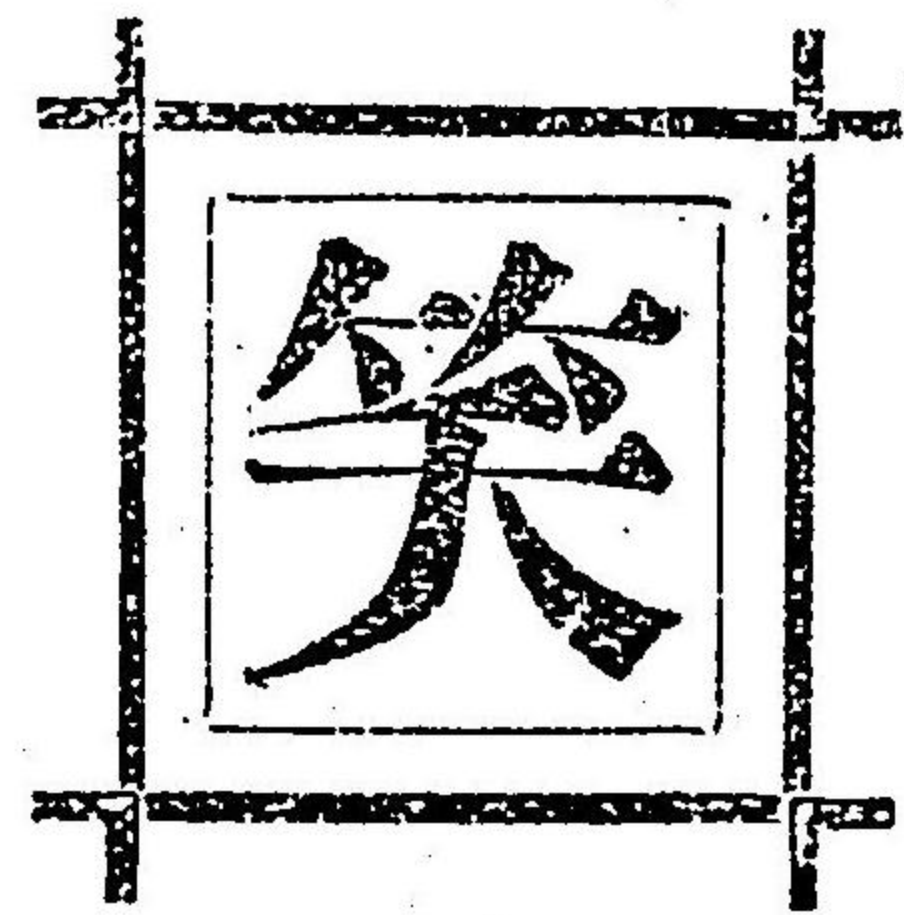
戀愛小説 江家としての
見水蔭氏が

戀に關する小説數十種を合せて
一卷とし、附録として氏は
が得意の詩篇數十種を添えたる
が、艶は固より艶なりと雖も、濃
を避けて淡、俗を捨て雅、情緒の
纏綿は春山の薄霞、靄々の内に猶
認む可戀の本神聖にして
きは、最愛の友として、閱讀あらん
ことを乞ふ、

目 丁 三 町 本 區 橋 本 日 市 京 東

館 文 博 元 兌 發

著 人 山 漣 谷 巖



(版 再)

全壹冊洋裝袖珍
紙數五百五拾頁
正價金四拾錢
郵稅金八錢
(寫眞) 拈華微笑、笑顏、
口繪 山笑、花笑、

この書笑といふ思出し笑の罪深き世辭
題して笑ふも思出し笑の罪深き世辭

笑の追従も虎溪三笑の禪味も時平が
學なば虎溪三笑の禪味も時平が

七笑の悪さもせずニ夕く笑ひ一人
畢竟あどなきニ夕く笑ひ一人

馬鹿笑し過ぎねど、若冷笑にあひなば、
し過ぎねど、若冷笑にあひなば、

苦笑は福の神呼出しの呪笑ひたまへと申す、
は福の神呼出しの呪笑ひたまへと申す、

(三)

館 文 博 區 橋 本 日 京 東 元 兌 發

新撰

再版

福

再版

落語

鶯亭金升君著

全一冊洋裝袖珍美本紙數三百頁

サア出ましたく、一休曾呂利も舌を捲て逃げ出す金升君が新作の落語、おまけに滑稽小説まで附て居て二百五十餘種ブラリと並んだ玉揃ひ、見れば誰でも笑はぬ者はなく、笑ふ門には福が来る、福の神の嫌ひな人は御覽なさらずとも宜しいがお好きな方は試みに御覽あれ、法螺をふくのふくこは、大違ひで御座い升。

正價金三拾錢 郵税四錢

(四)

發兌元 東京市日本橋區目 博文館

巖谷漣山人著

新版 女波男波

全一冊洋裝袖珍 正價金四拾五錢 郵税八錢

小説の艶に過ぐるを斥く勿れ、個中大寓意あり大諷刺あり。論説の罵に失するを咎む勿れ。這裡大抱負あり大見識あり。若し夫れ附録の變女大學に至りては變生男子が大氣炎、大の男も三舍を避くべき。蓋し當代の大問題なるべし。嗚呼大なる哉此書や實に寸珍の美本とす、呵々。

發兌元 東京本町三丁目 博文館

(五)

27/8/34

國府犀東君著

龍吹鶴語

犀東子の文は蜀棧を渉るか若は楚峽を溯るが如く満目嶽巖崔嵬奔激動盪人をして動心駭魄恒悖定まらざらしむ。其詩亦縦横排曩跌宕突兀一種伉爽豪邁の致あり、今其筐中に就き繙采して此冊子を得たり、亦以て江湖讀者胸中の奇を鼓するに足らんか。

全一冊洋装袖珍
紙數二百八十頁
正價金貳拾五錢
郵稅六錢

發兌元 東京本町三丁目橋區 博文館

(六)

文士大町桂月君著

大絃小絃

再版

再版

全一冊洋装袖珍美本紙數四百有餘頁

大絃急雨の如く小絃私語の如しこは琵琶の聲のみならんや。桂月先生の文は世已に定評あり、此書收むる所數十篇、議論に、記事に、才氣潑刺筆力縦横、或は莊重雄大或は輕妙自在、觀察も亦奇警にして銳利、以て普通文の模範とすべく以て作文の指南とすべし、天地間實に此痛快の文なかるべからず、文を好むの士、願くは一本を備へられよ。

正價金三拾錢 郵稅六錢

發兌元 東京本町三丁目橋區 博文館

(七)

文學士笹川臨風君著

新版

雨絲風片

新版

全一冊洋裝袖珍美本紙數三百二十拾頁

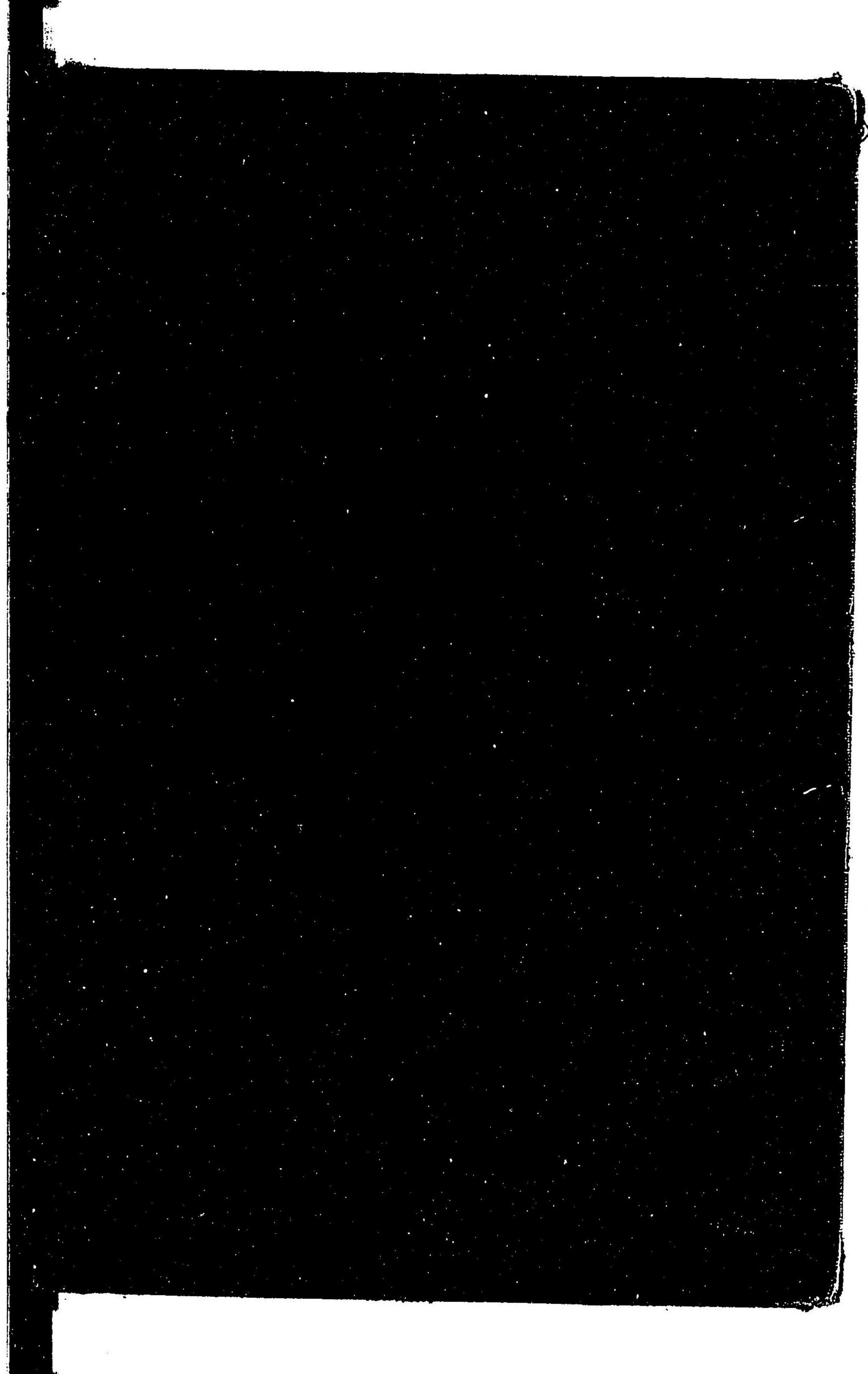
瀟洒なること春雨の如く、悲壯なること秋風に似たるか、著者生平作る所の文辭、史論と云はず、文學論と云はず。風俗の觀察に、紀行文に、小品文に、長篇短篇錯落として之を蒐む、明窓淨几の下、幸に才人の一顧を煩さんと欲す。

正價金貳拾五錢 郵 稅 六 錢

發 兌 元 東 本 京 三 日 橋 本 區 博 文 館

29

202



29
202

084987-000-1

29-202

星

江見 水蔭 / 著

M33

DBB-0416



